

2021 年度 修士設計

日本における都市型「祈りの空間」

Design of Prayer Space in the City of Japan

2022 年 3 月

高知工科大学院
工学研究科 基盤工学専攻
社会システム工学コース 1245079

大和 敦子

指導教員 渡辺 菊眞
副指導教員 田島 昌樹

要旨

日本における都市型「祈りの空間」

社会システム工学コース

1245079 大和敦子

日本における都市型「祈りの空間」とは、自然として普遍的・根源的存在である空と大地に祈りを捧げるための単一建築である。空と大地を拝するための構えとして、古代から近世にかけて形成されてきた自然信仰を根に据えた日本の「祈りの空間」の構成技法を踏襲する。単一建築として具現化するために、近世において成立した凝集された「祈りの空間」の技法を活用し、空間の集約化を図る。

「祈りの空間」は元来、自然信仰に由来する空間であり、ストーンヘンジやイワクラといった巨石建造物は宗教体系化以前の古代の「祈りの空間」である。日本の「祈りの空間」も自然信仰を根に据えており、神社や寺院の空間も原信仰核である自然に寄り添って古代から近世まで発展してきた。一方、近世に成立した、凝集された「祈りの空間」は、日本における「祈りの空間」の構成を単一建築に凝集して形成された巡拝形式の「祈りの空間」であり、栄螺堂や羅漢堂がその代表例である。これらは自己完結型の巡拝空間であり、自然を排除し標準設計が施されているため場所を問わず設置可能である。

現在、日本の都市では、葬祭場や納骨堂に代表される「祈りの空間」が建設されている。しかしながら、現代都市には信仰対象となる自然がないことが多く、これらの施設からも自然が排除されており、自然に寄り添うようにして発展してきた空間構成を継承していない。また近世に成立した凝集された「祈りの空間」の構成技法も活用されず、その意味では、日本で歴史的に発展を続けてきた「祈りの空間」とは無縁の存在である。現代都市において「祈りの空間」が必要とされているのは、根がなく漂うような都市生活の不安から解消され、「祈り」とともに自身の存在が確かな根を持てるよう願われているからだと考える。現代都市では確かに信仰しうる自然は乏しいが、空と大地はどこにでも確かに存在している。このことに改めて目を向けながら、日本古来の自然信仰を根に据えた「祈りの空間」を現代都市で実現することは極めて意義深いと考える。また、単一建築で「祈りの空間」を実現できる凝集された「祈りの空間」の構成は、設置場所に制限の多い都市において、集約的な「祈りの空間」を設計するためには極めて有効である。

本設計では、まず、日本において自然信仰を根に据える「祈りの空間」と、凝集された「祈りの空間」の構成分析を行う。次に、分析をもとに、空と大地を信仰核とする「祈りの空間」を設計する。最後に都市に設置可能なように凝集された「祈りの空間」をもちいて空間の集約化を行う。これにより都市型「祈りの空間」を形成する。

日本の現代都市において、自然信仰に根を持つ「祈りの空間」を設計すること、凝集された「祈りの空間」の構成技法を活用すること、これにより形成される「祈りの空間」は、日本古来の「祈りの空間」を継承する存在であるとともに、今後の日本において都市型「祈りの空間」を設計する際の有効な雛形になると考える。

Abstract

Design of Prayer Space in the City of Japan

Infrastructure Systems Engineering Course
1245079 Atsuko Yamato

The urban "prayer space" in Japan is a single building for praying to the sky and the earth, which are universal and fundamental in nature. As a stance for worshipping the sky and the earth, we will follow the composition technique of Japan's "prayer space" based on the natural beliefs that have been formed from ancient times to the early modern period. In order to embody it as a single building, we will utilize the technique of the aggregated "prayer space" established in the early modern period to consolidate the space.

The "prayer space" was originally a space derived from nature worship, and megalithic structures such as Stonehenge and Iwakura are ancient "prayer space" before religious systematization. The "prayer space" in Japan is also based on the belief in nature, and the space of shrines and temples has developed from ancient times to the early modern period alongside nature, which is the core of the original belief. On the other hand, the cohesive "prayer space" established in the early modern period is a pilgrimage-style "prayer space" formed by aggregating the composition of the "prayer space" in Japan into a single building. Sazaedo and Rakando is a typical example. These are self-contained pilgrimage spaces that can be installed anywhere because they have a standard design that excludes nature.

Currently, in Japanese cities, "prayer space" such as funeral halls and ossuary halls are being constructed. However, modern cities often do not have nature to be worshiped, and nature is excluded from these facilities as well, and they do not inherit the spatial composition that has developed to be close to nature. In addition, the technique of constructing the aggregated "prayer space" established in the early modern period is not utilized, and in that sense, it has nothing to do with the "prayer space" that has continued to develop historically in Japan. The need for a "prayer space" in modern cities is that it is hoped that the anxiety of urban life, which seems to have no roots, will be resolved, and that one's existence will have a solid root along with "prayer." I think. Nature is certainly scarce in modern cities, but the sky and the earth do exist everywhere. While paying attention to this again, I think it is extremely significant to realize a "prayer space" based on the ancient Japanese belief in nature in a modern city. In addition, the composition of the aggregated "space of prayer" that can realize the "prayer space" with a single building is extremely necessary for designing an intensive "prayer space" in a city with many restrictions on the installation location. It is valid.

In this design, we first analyze the composition of the "prayer space" that is rooted in natural beliefs and the aggregated "prayer space" in Japan. Next, based on the analysis, we will design a "prayer space" with the sky and the earth as the core of faith. Finally, the space will be consolidated using the "prayer space" that is aggregated so that it can be installed in the city. This forms an urban "prayer space". In the modern city of Japan, designing a "prayer space" rooted in natural beliefs, utilizing the composition technique of the aggregated "prayer space", and the resulting "prayer space" It inherits the ancient Japanese "prayer space" and is considered to be an effective model for designing an urban "prayer space" in Japan in the future.

目次

要旨	1
英文用紙	2
目次	3
図版一覧	5
序章	7
序-1. 設計の背景	8
序-2. 設計の目的	9
序-3. 既往の研究	10
序-4. 設計の方法	11
第1章 日本における「祈りの空間」	12
1-1. 「祈り」と「祈りの空間」	13
・ 「祈り」と「祈りの空間」の定義	
・ 「祈りの空間」の事例	
1-2. 日本における「祈りの空間」	18
・ 日本における「祈りの空間」の定義	
・ 日本における凝集された「祈りの空間」の定義	
・ 日本における都市型「祈りの空間」の定義	
第2章 日本における「祈りの空間」の基本構成	20
2-1. 線形空間構成と、その事例	21
2-2. 対称空間構成と、その事例	25
2-3. 円環空間構成と、その事例	27
2-4. 日本における「祈りの空間」の特質	29
第3章 日本における自然信仰を根に据えた「祈りの空間」の構成	30
3-1. 山の信仰を根に据えた「祈りの空間」の構成	31
3-2. 海の信仰を根に据えた「祈りの空間」の構成	40
3-3. 大地の信仰を根に据えた「祈りの空間」の構成	45
3-4. 日本における自然信仰を根に据えた「祈りの空間」の特質	47
第4章 日本における凝集された「祈りの空間」の構成	49
4-1. 水平凝集-羅漢堂型の空間構成	50
4-2. 垂直凝集-栄螺堂型の空間構成	50
・ 積層型の空間構成	
・ 二重螺旋型の空間構成	
4-3. 日本における凝集された「祈りの空間」の特質	54

第5章 日本における都市型「祈りの空間」の設計条件と設計指針・手法	55
5-1.日本における都市型「祈りの空間」の設計条件	56
・日本における「祈りの空間」の概要	
・日本における都市型「祈りの空間」の設計条件	
・日本における「祈りの空間」から日本における都市型「祈りの空間」へ	
5-2.日本における都市型「祈りの空間」の設計指針	60
5-3.日本における都市型「祈りの空間」の設計手法	62
第6章 日本における都市型「祈りの空間」の設計内容	65
6-1.日本における都市型「祈りの空間」の解剖図解：各部名称とその概略	66
6-2 日本における都市型「祈りの空間」の配置計画	67
6-3.日本における都市型「祈りの空間」の平面および断面計画	70
6-4.日本における都市型「祈りの空間」のシーケンス計画	74
6-5.日本における都市型「祈りの空間」の構造計画	81
終章	82
終-1. 各章のまとめ	83
終-2. 日本における都市型「祈りの空間」の意義	86
終-3. 修士設計の成果と課題	86
付録	89
引用参考文献	91

図目次

第1章

- 図 1-1 ストーンヘンジ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
- 図 1-2 ダマスクスの大モスク・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
- 図 1-3 旧サンピエトロ大聖堂の平面図(左)と断面パース右)・・・・・・ 17
- 図 1-4 サン・ピターレ聖堂・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
- 図 1-5 サーンチーのストゥーパ・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
- 図 1-6 ボロブドゥール・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17

第2章

- 図 2-1 線形直列空間構成の空間概念図・・・・・・・・・・・・ 22
- 図 2-2 生石神社・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
- 図 2-3 大神神社・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
- 図 2-4 線形並列空間構成の空間概念図・・・・・・・・・・・・ 23
- 図 2-5 賀茂神社の平面図・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
- 図 2-6 蓮華王院本堂(三十三間堂)の平面図・・・・・・・・・・・・ 24
- 図 2-7 対称空間の空間概念図・・・・・・・・・・・・ 25
- 図 2-8 平等院鳳凰堂・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
- 図 2-9 伊勢神宮の平面図・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
- 図 2-10 円環空間構成の空間概念図・・・・・・・・・・・・ 27
- 図 2-11 四国八十八ヶ所霊場・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
- 図 2-12 栄螺堂の平面図、立面図・・・・・・・・・・・・ 28

第3章

- 図 3-1 地形と金刀比羅宮の空間構成の関係・・・・・・・・・・・・ 33
- 図 3-2 地形と吉備津神社の空間構成の関係・・・・・・・・・・・・ 36
- 図 3-3 地形と長谷寺の空間構成の関係・・・・・・・・・・・・ 39
- 図 3-4 住吉大社の空間構成・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
- 図 3-5 地形と住吉大社の空間構成の関係・・・・・・・・・・・・ 41
- 図 3-6 厳島神社の空間構成・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
- 図 3-7 生島足島神社本殿の平面図・・・・・・・・・・・・ 46
- 図 3-8 延暦寺根本中堂の平面図(左)・断面図(右下)・立面図(右上)・・・・ 46

第4章

- 図 4-1 五百羅漢寺の内観・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
- 図 4-2 羅漢堂の概念図・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
- 図 4-3 曹源寺栄螺堂の平面図・断面図・・・・・・・・・・・・ 52
- 図 4-4 会津若松栄螺堂の平面図・断面図・・・・・・・・・・・・ 53

第5章

図 5-1	日本における自然信仰を根に据えた「祈りの空間」の基本形の概念	57
図 5-2	日本における自然信仰を根に据えた「祈りの空間」の古形式の概念	57
図 5-3	日本における「祈りの空間」から日本における都市型「祈りの空間」への変換概念図	59
図 5-4	設計指針の図解	61
図 5-5	設計手法ダイアグラム	64

第6章

図 6-1	日本における都市型「祈りの空間」の空間解剖図	67
図 6-2	北海道における日本における都市型「祈りの空間」の配置	68
図 6-3	東京都における日本における都市型「祈りの空間」の配置図	68
図 6-4	京都府における日本における都市型「祈りの空間」の配置図	69
図 6-5	高知県における日本における都市型「祈りの空間」の配置図	69
図 6-6	日本における都市型「祈りの空間」の平面図	71
図 6-7	日本における都市型「祈りの空間」の断面図および立面図	72
図 6-8	空之拝所の計画図	73
図 6-9	入口から零之間までの経路	74
図 6-10	外陣	75
図 6-11	零之間	75
図 6-12	零之間から空之拝所までの経路	76
図 6-13	空之拝所	76
図 6-14	空之拝所から大地之拝所までの経路	77
図 6-15	空之拝所から大地之拝所への移動	77
図 6-16	大地之拝所	78
図 6-17	大地之拝所から零之間までの経路	78
図 6-18	零之間	79
図 6-19	零之間から出口までの経路	79
図 6-20	虚之拝所側	80
図 6-21	下りのスロープ	80
図 6-22	日本における都市型「祈りの空間」の構造計画断面図	82

序章

序-1. 設計の背景

「祈り」は絶対的なものを志向せざるをえないという人間の自然本性に由来した行為・状態である。「祈り」のための場を「祈りの空間」と定義する。具体的には自然災害が起こらないように神に願う、また豊作や豊漁を祈願するなどの行為が「祈り」としてイメージしやすい。しかし、それを原理的にとらえた場合、上述の定義となる。

「祈りの空間」の起源まで遡るとストーンヘンジや、イワクラなどの巨石建造物の存在が指摘できる。これらは宗教的な教義に基づくものではなく、純粹に「祈る」ことができる場である。このように「祈りの空間」は宗教の体系化以前から必要とされていた。

日本における「祈りの空間」は元来、自然信仰を根に据えており、古代から近世にかけて山や海などの信仰核に対し、複数の建築を用いて全体を構成する「祈りの空間」を形成してきた。また、近世になると複数の建築からなる「祈りの空間」の空間構成を1つの建築に凝集させた「祈りの空間」がつくられ、これにより場所を問わず設置可能な「祈りの空間」が実現する。しかしながら、凝集された「祈りの空間」は日本における「祈りの空間」が根に据えていた自然を排除した空間であり、その意味では「祈りの空間」の亜種である。

現在、日本の都市においても「祈りの空間」は建てられる状況にある。葬祭場や納骨堂などはその代表的なものである。しかし、日本都市部では周辺に信仰対象となる山や海がないことが多く、自然信仰との関係を持ちにくい状況にある。また、日本における凝集された「祈りの空間」は、場所問わず設置可能であるため、都市においても適応可能であるが、その空間構成が取り入れられている事例はない。また、たとえ、この空間構成を活かした「祈りの空間」を形成したとしても、それは聖なる自然との関係を排除しているため、日本における元来の「祈りの空間」の根が欠落してしまう。

現代都市において必要とされる「祈りの空間」に、日本における「祈りの空間」の空間構成技法を踏襲すること、そしてその根にある自然信仰をも引き継ぐことが必要ではないか。そのことで日本における「祈りの空間」が元来持つべき質を備えた建築が都市においても構築できるものとする。

本設計では、普遍的・根源的に存在する空と大地を自然信仰の核に据えることとする。そして、自然信仰を根に据えた日本の「祈りの空間」の構成をもとに空と大地に祈りを捧げることができる場を構築する。さらに、近世日本に見られる凝集された「祈りの空間」の構成を活用することで、高度に集約された巡拝空間を形成する。これにより都市においても自然信仰を核に据えた日本における「祈りの空間」を単一の建築として提案することが可能になる。この建築は場所を問わず設置可能であり、しかも自然信仰を根に据えていること、さらには単一の建築として構築可能であることから、日本の都市において「祈りの空間」を設計する際の雛形になりうるものとする。

序-2. 設計の目的

本設計の目的は日本における都市型「祈りの空間」を設計することである。日本の都市型「祈りの空間」とは、日本の都市において、空と大地を自然信仰核に据えた単一建築としての「祈りの空間」である。空と大地を自然信仰核に据える理由は、自然環境に乏しい都市においてさえも必ず存在する根源的な自然だからである。自然信仰を根に据える理由は日本の「祈り」の空間は古代から近世にかけて、その多くが聖なる自然に寄り添って発展してきたからであり、これを踏襲することを意図している。単一建築にて構築する理由は、現代都市において設置可能な規模とするとともに、近世日本で成立した凝集された「祈りの空間」の、高度に集約され、かつ標準設計化された技法を継承するとともに、これにより日本各地の都市にて建設可能な標準型となることを意図している。

序-3. 既往の研究

「祈り」については、棚次正和の「祈りの人間学 いきいきと生きる」に定義されている。また同書においては、「祈りの理論」「祈りの実践」「祈りの世界観」についても述べられ、「祈りの」原理とともに、その実践例についても示されている。

世界の「祈りの空間」の実例をまとめたものに、中川武の「世界宗教建築辞典」がある。これは古今東西の宗教建築を網羅したものである。建築史という枠組みの中で世界の建築を位置付けたものに「世界建築史 15 講」がある。ここでは世界各地の「祈りの空間」がそれを支える世界観とともに記述されている。また宗教建築という視点ではなく、宇宙的建築をまとめたものに「Cosmic Architecture in India」がある。ここに紹介されている建築はインドにおける天体観測装置が主ではあるが、総論で紹介されているストーンヘンジなどは天体観測とともに太陽に祈りを捧げる場を形成していることがうかがえる。

日本における「祈りの空間」の空間構成と、それを支える世界観およびその変遷については井上充夫の「日本の建築空間」に詳しい。同書は「祈りの空間」に限らず、住居を含むすべての日本建築の空間発達史をまとめたものである。本設計では、これらの記述から、宗教体系化以前の「祈りの空間」および、神社、寺院の空間発達史を参照する。

上記は世界および日本の建築空間とその変遷を記した書籍が主となっている。これらから、「祈りの空間」の空間構成を読み取ることは可能である。ただし、これら既往の研究は空間を構築する手法を示すものではない。本設計では、既往研究と、日本における「祈りの空間」の空間調査をもとに、その特質を読み解くとともに、読み解いた特質から、「祈りの空間」構築のための手法を構築すること、さらにはその雛形を具体的に設計することに大きな特徴があり、これは本設計独自のものといえる。

序-4. 設計の方法

本修士設計では全6章で構成される。

序章では、設計の背景、設計の目的、既往の研究、設計の方法について記す。

第1章では、「祈り」と「祈りの空間」の定義、日本における「祈りの空間」の定義を記す。

第2章では、日本における「祈りの空間」の基本構成とその事例についてまとめ、特質を記す。

第3章では、日本において自然信仰を根に据えた「祈りの空間」の構成について分析結果をまとめ、特質を記す。

第4章では、日本における凝集された「祈りの空間」の構成について分析結果をまとめ、特質を記す。

第5章では日本における都市型「祈りの空間」の設計条件と指針、ならびに設計手法を記す。

第6章では、日本における都市型「祈りの空間」の設計内容について記す。

終章では、各章のまとめと、日本における都市型「祈りの空間」の意義、修士設計の成果と課題を記す。

第1章 日本における「祈りの空間」

この章では、「祈り」と「祈りの空間」の定義を記す。また、日本における「祈りの空間」と日本における凝集された「祈りの空間」、日本における都市型「祈りの空間」の定義を記す。

1-1. 「祈り」と「祈りの空間」

・「祈り」と「祈りの空間」の定義

『祈りの人間学—いきいきと生きる』棚次正和(2009)では「祈りは、人間の自然本性に由来する行為であり、状態である」と述べられている。また、「絶対的なものを志向せざるをえないのが、人間の自然本性」とされる。一般に「祈り」という場合、神や死者に捧げる宗教的な行為、豊作・豊猟を自然に祈願する行為、時に災害などを引き起こす荒ぶる自然を鎮める行為などが、想起される。ここでは神、死（死者の魂）、自然などが祈りの対象となるが、それは人智を超えた存在＝「絶対的なもの」がそれぞれの状況において具体性を帯びて、神、死、自然となってあらわれている。しかし、究極的にはそれらは「絶対的なもの」であり、それゆえに、祈りとは「絶対的なもの」を志向する行為だと言える。以上から、

「祈り」：絶対的なものを志向せざるを得ない人間の自然本性に由来する行為・状態。

「祈りの空間」：人間が絶対的なものを志向するための構えを持つ場。

と定義する。

・「祈りの空間」の事例

世界には様々な「祈りの空間」が存在している。ここでは「祈りの空間」として、最も古い形式（宗教的な教義とともに体系化される以前の形式）を示しているストーンヘンジならびにその他の巨石構築物、世界三大宗教における「祈りの空間」について取り上げる。

■宗教体系化以前の「祈りの空間」

ストーンヘンジ

紀元前 3100 年頃の石器時代にストーンヘンジは巨大な儀式の場としてつくられた。その具体的機能について諸説あるが、中心空間をなすストーンサークルが、太陽と月の動きを示していることが明らかにされている。このことから天体観測装置であることは明らかであるが、それとともに、人間を取り巻き、大いなる恵みと時に災厄をもたらす自然に対して、その秩序を明らかにしつつ、特に夏至や冬至という自然現象の特異点において、祈りを捧げるための構えを持っている。(図 1-1) ストーンサークルについては、ストーンヘンジだけではなく、日本の東北地方に存在する縄文時代の遺構：大湯のストーンサークルなど、類例は世界に数多く存在する。また、巨石建造物には、この他に立石（メンヒル）、列石、ドルメンなど、幾つかの形式があるが、これらもまた自

然に「祈り」をささげるための構えと考えられている。

■世界三大宗教における「祈りの空間」

キリスト教における「祈りの空間」

キリスト教は、イエスを救世主として信仰する一神教である。聖書を聖典とし教会での集会を重視していることが大きな特徴である。313年のコンスタンティヌス帝によるキリスト教の公認、392年のテオドシウス1世によるキリスト教の国教化により広くヨーロッパ世界において信仰されるようになった。

教会堂は、バシリカ式、集中式の二つの空間形式に大別できる。バシリカ式は一的に矩形またはラテン十字型平面を持つ。矩形長軸の中心軸に身廊があり、その両脇に側廊を従える。身廊最奥部に半円型のアプスがあり、身廊両脇の列柱によるパース効果から奥行き方向への動的空間を持つ。入口を西（死の方位）に設置し、反対側の東（再生の方位）の壁にアプスがある。身廊は側廊よりも天井が高く、その高さの差を活かしてハイサイドライトを設けている。これにより、奥行き方向への動きと上方への光に導かれるような空間となる。バシリカ式は奥へ向けての空間方位が明瞭であり、信者が参集しやすいことからミサに向けた機能的な空間として位置付けられている。（図 1-3）集中式は明確な中心を備えた平面形状の空間であり、円形、正多角形、正方形、ギリシア十字などがその代表的な平面形状である。これら平面の中心上部にはドーム屋根がかけられることが多く、求心的な空間となる。求心性、中央ドームの上昇性は宗教的空間として高い質を備えるが、その一方でミサには不適であることが指摘されている。（図 1-4）

イスラームにおける「祈りの空間」

イスラーム教は、厳格な一神教でアラビア半島のメッカに生まれた預言者ムハンマドにより唱えられた。人や宇宙を含むすべてのものは絶対神アッラーにより想像されたという考え方をもつ。イスラームは暦元年が622年、8世紀半ばまでに西はイベリア半島から東は中央アジアの中緯度乾燥地域に支配を広げた。11世紀以後アナトリアから東欧へ、12世紀末以後インド亜大陸にイスラームが拡大する。加えて交易を通じて西アフリカや東アフリカ沿岸部、東南アジアへと広まる。そして現在までに世界の宗教人口を占めるようになった。

イスラームにおける「祈りの空間」は、一つの神殿と、そこを向いて祈る礼拝堂（モスク）からなる。一つの神殿とはメッカのカーバ神殿であり、この一点がイスラームの聖なる磁極となる。一方、世界各地に数多く存在する全てのモスクはメッカに求心する。モスクの基本的な構えを以下に記す。幅広矩形の礼拝室とその前にほぼ同大の中庭を備える。中庭には泉があり、ここで身を浄める。礼拝室の最奥部にはメッカへの方向と直角方向にたつ長大なキブラ壁があり、信者は横列状にキブラ壁を向いて礼拝する。キ

ブラ壁には半円状のニッチであるミフラーブが穿たれ、カーバへの向きをより強調する。イスラーム世界の「祈りの空間」の全体は、カーバを絶対中心にし、そこを無数のモスクが同心円状に取り囲む集中式空間をなすといえる。(図 1-2)

仏教における「祈りの空間」

仏教は、仏陀により誕生した。仏教における世界観は輪廻と解脱の考えに基づいている。人の一生は苦であり永遠に続く輪廻の中で終わりなく苦しむことになる。その苦しみから抜け出すことが解脱であり、修行により解脱を目指すことが目的とされていた。現在までに日本やチベットに伝わる。また、タイやスリランカなど原始仏教の伝統を重視し、厳格な戒律保持をほこる南方上座部系仏教がある。

仏教における「祈りの空間」において、大きく二つの建築種別を指摘できる。一つは釈迦の骨を納めるストゥーパであり、他方は数多くの諸仏の家といえる堂である。前者はインドのサンチーにその起源を見ることができ、半球状の土饅頭の上に相輪を備える。ストゥーパは仏教の伝播に従って、その姿を変えていき、中国、日本などの東アジアでは多重の塔をなすに至る。堂は諸仏の家であり、聖域各所に幾何学的な縛りなく散りばめられた配置をなす場合もあれば、曼荼羅状に全体をなす配置がとられることもある。多神教であるため、唯一絶対の中心建築があるわけではなく、ストゥーパと堂が大きな全体として秩序ある宇宙を示すような配置といえる。(図 1-5) (図 1-6)

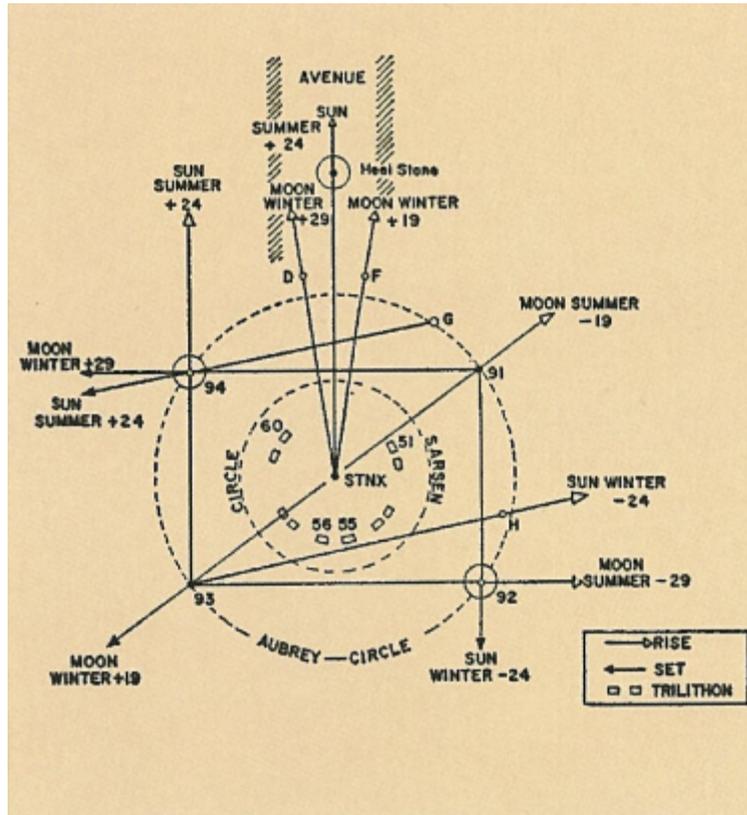


図 1-1 ストーンヘンジ¹⁾

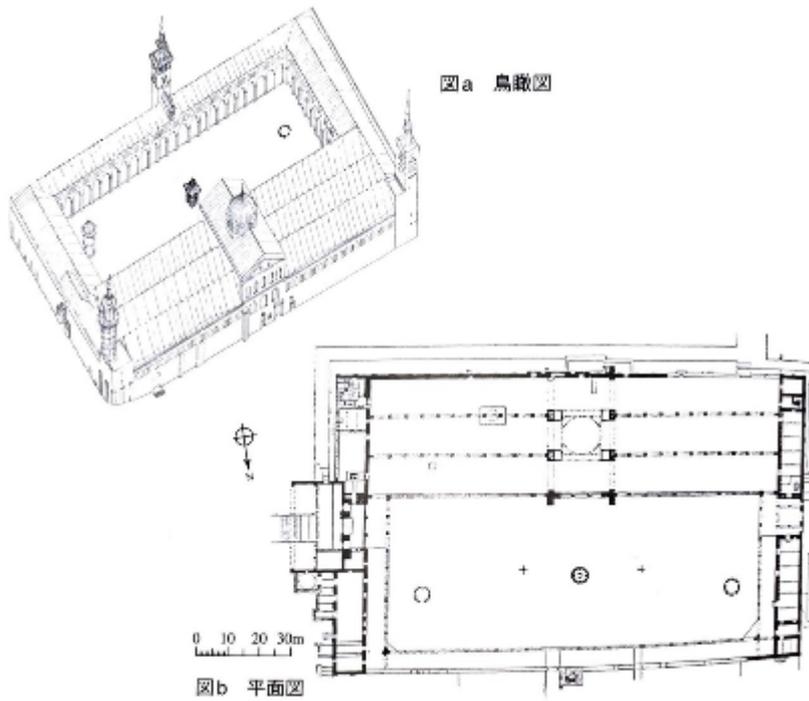


図 1-2 ダマスクスの大モスク²⁾

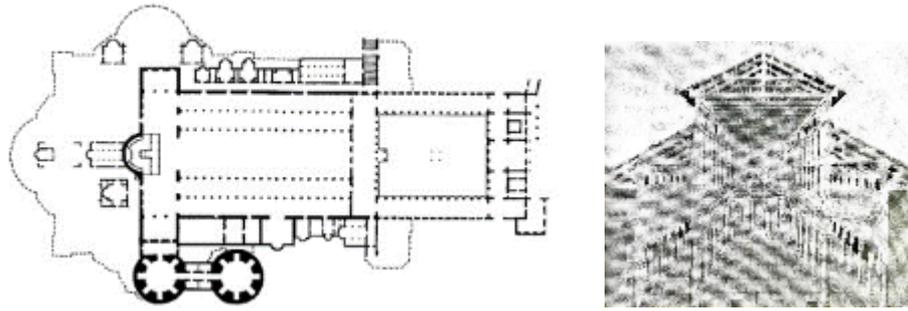


図 1-3 旧サンピエトロ大聖堂の平面図(左)と断面パース (右) ²⁾

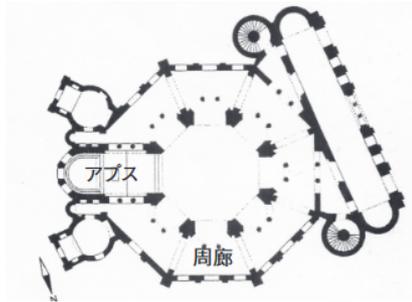


図 1-4 サン・ピターレ聖堂の平面図 ¹⁵⁾

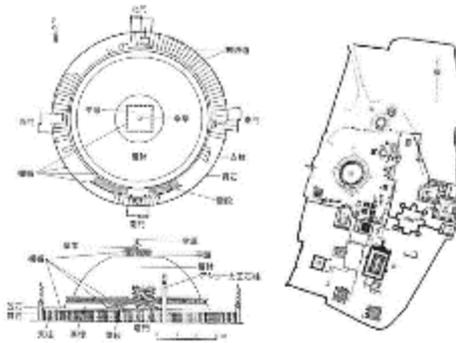


図 1-5 サンチーのストゥーパの平面立面および広域配置図 ³⁾



図 1-6 ボロブドゥール ¹⁶⁾

15) <https://www.iwanami.co.jp/files/tachiyomi/pdfs/0281810.pdf> より引用

16) heritage.asia/indonesia/borobudur/-j.com/theme/world-https://www.his より引用

1-2. 日本における「祈りの空間」の定義

・ 日本における「祈りの空間」の定義

日本において自然信仰を根に据えて形成された「祈りの空間」である。

日本における信仰は、元来、自然への信仰（アニミズム）であった。古代では森羅万象に神を見出し、山、海、森、巨石、巨木など自然そのものを信仰していたと考えられる。そのうち、神道における神社は、聖なる自然に寄り添う形で境内を形成してきた。仏教伝来後、日本各地に寺院が形成されるが、それらはやがて神道と習合し、やはり、聖なる自然に寄り添って境内を形成するものが数多く成立した。全国各地に見られる霊場はまさにそう言った場である。神社もまた習合過程において数多くの社殿を構えるようになるが、その多くは聖なる自然に寄り添って配置されている。このように日本における「祈りの空間」は大きくは、自然とともにある神社および寺院であるが、それとともに聖なる自然に寄り添って営まれる葬送地もまた、「祈りの空間」である。

・ 日本における凝集された「祈りの空間」の定義

日本における「祈りの空間」の構成を単体建築に凝集して形成された巡拝形式の「祈りの空間」である。凝集において、「祈りの空間」が寄り添ってきた聖なる自然は排除されてしまっており、その意味では「祈りの空間」の定義から外れる亜種である。

日本における「祈りの空間」は自然信仰に根を据えて構えられた場である。神社、寺院において、古代、中世、近世と時代が移り変わるに従って、世界観が変化し、それに伴って建築空間の在り方も変容していくが、それでも、聖なる自然に寄り添うことを共通の特性としてきた。建築配置を時代ごとに再編成しながら、聖なる自然と寄り添う「祈りの空間」としての全体性を保ってきたのである。しかし、近世に成立した凝集された「祈りの空間」は、自然を信仰核に据えた「祈りの空間」の空間構成のみを踏襲し、自然への信仰は排除してしまっている。代表的なものとしては羅漢堂や栄螺堂が挙げられる。これらは聖なる自然と関係をもたない自己完結的な「祈りの空間」であるため、場所を問わず設置可能であり、事実、全国各地で建てられている。このように自然信仰を排除した空間であるため、凝集された「祈りの空間」は「祈りの空間」の亜種である。しかし、自然に寄り添いながら古代から近世にかけて再編成を続けて形成されてきた「祈りの空間」の構成を単体建築に高度に凝集し結晶化させた空間である。

・日本における都市型「祈りの空間」の定義

日本の都市において、空と大地を自然信仰核に据えた単一建築としての「祈りの空間」である。

空と大地を信仰する構えとしては、古代から近世にかけて形成されてきた日本の「祈りの空間」の構成技法を踏襲するとともに、単一建築への空間集約の手法については凝集された「祈りの空間」の技法を活用する。

空と大地を自然信仰の核とする理由は、人間を取り巻く自然として最も普遍的、根源的な存在だからである。地面さえあれば、その頭上に必ず空があり、人間は空と大地の間に生きている。聖なる自然に乏しい現代都市においても、空と大地である限りは自然を信仰核に据えることが可能になる。日本の「祈りの空間」の空間構成技法は、聖なる自然と寄り添いながら形成された古代から近世にかけて継続的に編成されてきた技法であり、これを取り入れることで、古代からの歴史を継承可能な空間となる。凝集された「祈りの空間」の構成手法は、近世に成立した高度に集約された空間構成手法であり、単一の空間に組み入れるためにはもっとも有効な手法であるとともに、標準設計化する可能性も有する。

人が生きていく上で自然は必要不可欠である。元来の日本も、人と自然は密接な関係を持ちながら生きてきた。事実、日本における「祈りの空間」も自然を信仰核に据え、聖なる自然に寄り添いながら、形成されてきた。しかし、現代の日本では、人と自然が切り離された状態にある。特に、物にあふれた都市では聖なる自然との関係をもちにくい状況である。このような状況では人が自然の中で生きていることが分からなくなってしまう。都市においても自然との関係を再認識することができる空間として日本における都市型「祈りの空間」を設計することで、人が都市においても自然とともに自然を慈しみ自然を畏敬しながら生きて行くことを可能にする。

第2章 日本における「祈りの空間」の基本構成

本章では、日本における「祈りの空間」の最も基礎的な「線形空間構成」、「対称空間構成」、「円環空間構成」の3つを取り上げる。

2-1. 線形空間構成と、その事例

線形空間構成は、一本の軸線に沿って建築が配置される空間である。線形空間構成は、線形直列空間構成と線形並列空間構成の2種類に分類される。

a. 線形直列空間構成

線形直列空間構成は一本の軸線に並ぶ建築群に対し、軸線上を移動しながら順を追って観賞する空間である。(図2-1)例は生石神社、大神神社をあげる。

生石神社は、一本の直線軸上に鳥居、石段、絵馬殿、拝殿、本殿が並び、最奥部に「石宝殿」が配置されている。一本の直線軸上にこれらの建築が並ぶため、絵馬殿、拝殿、本殿を門型の建築にすることで参拝者の行く手を阻まず、最奥部の「石宝殿」に移動できる。(図2-2)

大神神社は、一本の軸上に大鳥居、二の鳥居、拝殿、本殿の役割を果たす三つ鳥居、が並ぶ。そして禁足地を通した最奥部の三輪山がある。この神社も門型の建築としている。(図2-3)

b. 線形並列空間構成

線形並列空間構成は一本の軸線上に複数の建築が横並びに配置された空間である。この空間で重要なのは、その軸線はあくまで建築を並べるための基準線を成している点であること、しかもそれらの建築は原則として軸線と直交する正面をもつ空間であることである。よって、参拝者は正面を揃えてずらりと横並びする建築群を同時的に観賞するのである。(図2-4)例は、賀茂神社と蓮華王院本堂(三十三間堂)を挙げる。

賀茂神社は、五棟の横並びする社殿とそれを同時に観賞するための回廊がある、まさに線形並列空間である。(図2-5)

蓮華王院本堂(三十三間堂)は、正面三十三間の長大な堂舎に、千一体の仏像が安置されている。この空間は、仏像を一つ一つ見ることを目的としておらず、仏像が極端に多いということを表象している。つまり、この建物は、千体もの仏像が安置されているということと同時に観賞することに意味がある。(図2-6)

線形並列空間構成は並ぶ物理的距離が大きくなると実際に同時にそれらを見るのは困難である。ただし、この場合でも順次建築を見ていきつつ、最終的にはそれらが並列にならぶさまを同時的に把握することとなる。その意味でこういった場合でも同時的に鑑賞している。

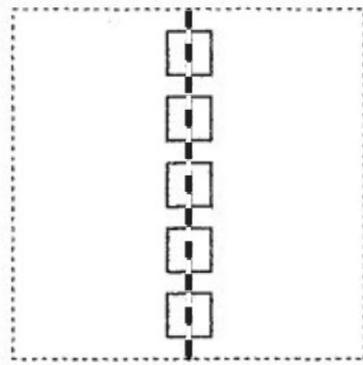


図 2-1 線形直列空間構成の空間概念図



図 2-2 生石神社⁴⁾

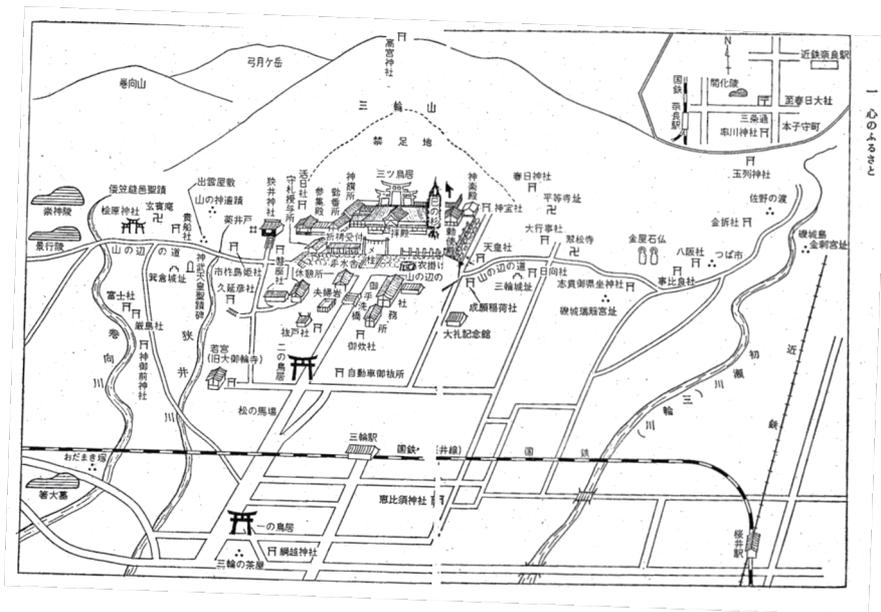


図 2-3 大神神社⁶⁾

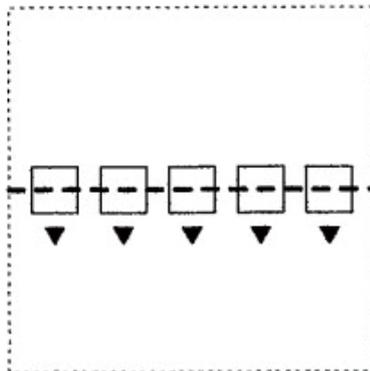


図 2-4 線形並列空間構成の空間概念図

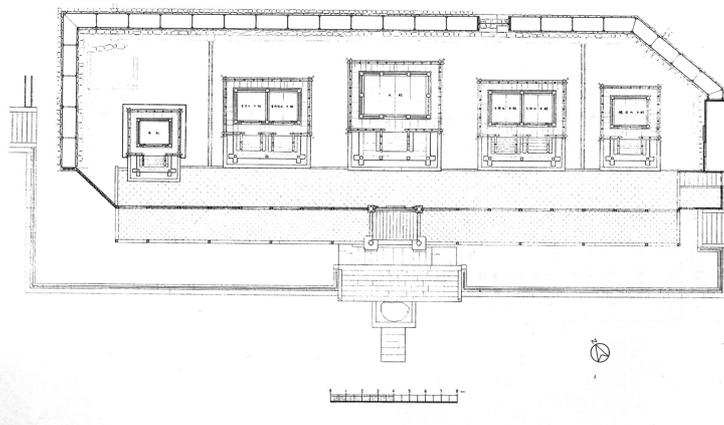


図 2-5 賀茂神社の平面図⁷⁾

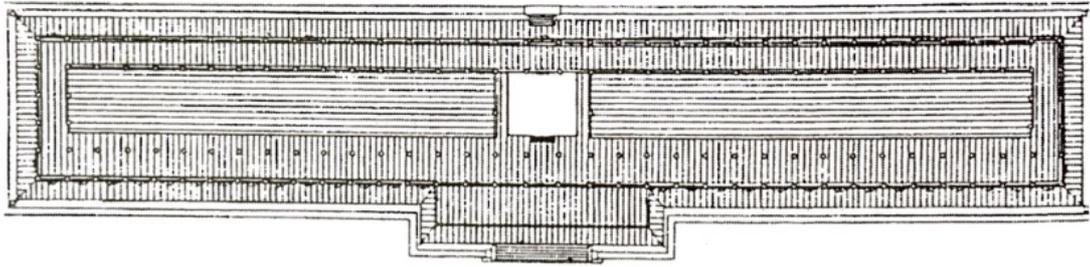


図 2-6 蓮華王院本堂(三十三間堂)の平面図⁸⁾

2-2. 対称空間構成と、その事例

対称空間構成は、四方対称、前後左右対称、左右対称、点对称の空間が考えられるが、本設計では左右対称空間を扱う。左右対称空間とは一本の軸線を中心軸として、その左右に中心軸からの距離が等しい要素を割り振って成立する空間である。(図2-7) 事例として、平等院鳳凰堂と伊勢神宮を挙げる。

平等院鳳凰堂は、中央の主建築とその左右の翼廊からなる対称空間構成である。また、この空間は興福寺の回廊の前半部分を切り落とした発展形として鳳凰堂式プランといわれている。このことから平等鳳凰堂は建物の境を対称軸に半分を実体、残りの半分を空虚とした対称空間構成である。(図2-8)

伊勢神宮の信仰核は東西に隣接した同型同大の矩形の敷地である。この二つの敷地は一本の南北軸を対称軸として東西に並ぶ左右対称の空間である。敷地内部は一方が同心角の四重の垣根に嚴重に囲まれ、正殿と二つの宝殿が鎮座する本殿地であり、他方はほぼ何も存在しない空地(=古殿地)がある。この空地は禁足地とされており、聖なる空虚である。(図2-9)

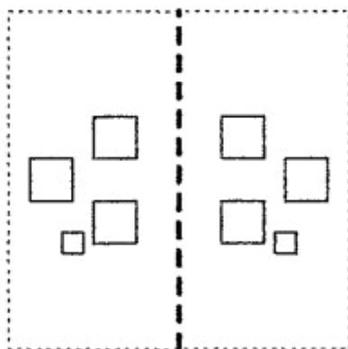


図 2-7 対称空間の空間概念図

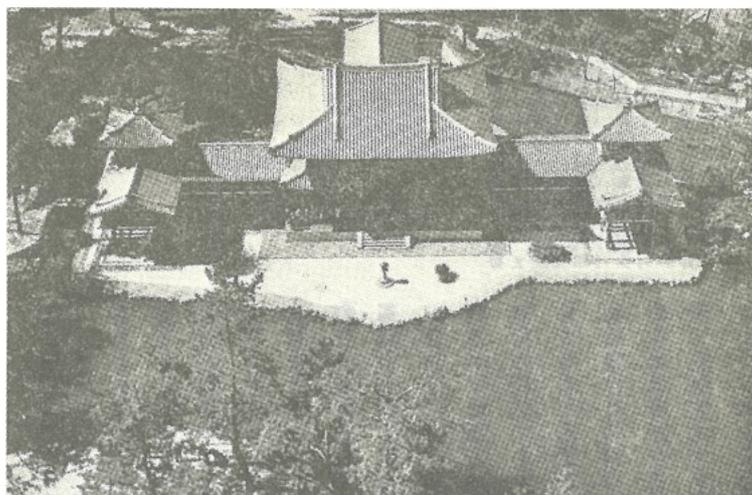


図 2-8 平等院鳳凰堂⁹⁾

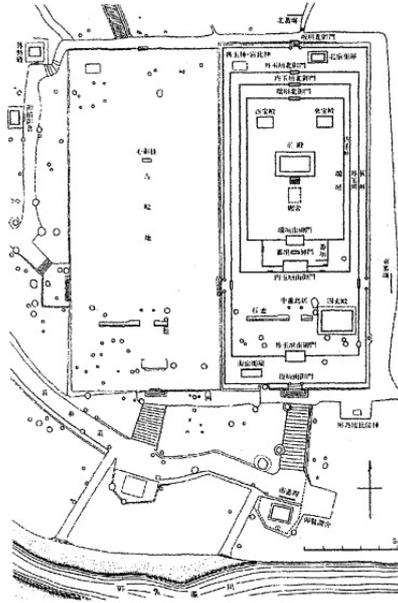


图 2-9 伊勢神宮 16)

2-3. 円環空間構成と、その事例

円環空間構成は、ループを描く一本の軸線に沿って建築が配置される空間をいう。この軸線はループを描くため、始点と終点が重なることが重要である。(図 2-10) 例は、四国八十八ヶ所と栄螺堂を挙げる。

四国八十八ヶ所は、四国全土を舞台に、第一番霊場から第八十八番霊場までをぐるりと一巡するものである。第一番霊場と第八十八番霊場は一致しないが、両者の位置は全体で見ると非常に近接しており、円環を形成しているといって差し支えない。また、第八十八番霊場は巡礼路の最奥部にあたるが、巡礼者はこの最奥部を目指すのではなくすべての霊場を巡って円環をなすことを目指す。従って、各霊場は明確なヒエラルキーをもたない。さらに、四国八十八ヶ所は、四国という大きな島の外周をめぐる。それゆえ円環内部には経験されない広大な領域が形成される。また、その外部にも広大な海が広がる。しかし、円環が形成する内側領域や外側領域が形成する核心は、実際の具体的な広さとは異なる観念的な広がりや高みを持つものである。すなわち、円環外側の海は無限の彼方まで続く観念としての海であり、円環の内側でそびえ立つ山は天まで届く観念としての山である。従って、円環空間構成が形成する領域を通して無限の広さと高さを有する空間が召還される。(図 2-11)

栄螺堂は、西国三十三観音所を一つのお堂に凝集させた建築である。二重螺旋のスロープに沿って西国三十三観音像が安置され、参拝者はこのお堂を上を一回転半、下を一回転半の計三回転巡ることによって巡礼を完了できる。この空間においても明確なヒエラルキーはなく巡礼者は巡って円環を成すことを目指す。(図 2-12)

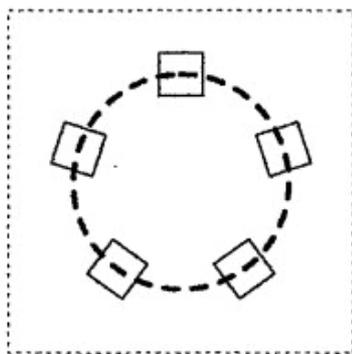


図 2-10 円環空間構成の空間概念図



図 2-11 四国八十八ヶ所霊場

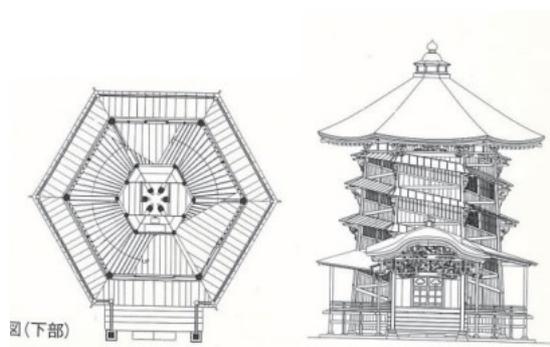


図 2-12 栄螺堂の平面図、立面図⁵⁾

2-4. 日本における「祈りの空間」の特質

ここでは、日本における「祈りの空間」の基本構成の特質をまとめる。

線形空間構成

a. 線形直列空間構成

この構成は、一本の経路に沿って全体が展開されることで、絵巻物をくりひろげて見ているような経験となる。それゆえ、その経験が高揚感あるものとして保持できるように最奥部に核となる建築を据え、そこにいかに劇的に人を導くことができるかが考慮されて一連の建築が配置されることになる。つまり、数珠つながりになった空間の継時的観賞と最奥部の核心空間がこの構成の特質として挙げられる。

b. 線形並列空間構成

この構成は、横一列に並ぶ建築群を同時的に鑑賞することを重要としている。従って、並列した建築を同時に鑑賞できるスペースが望ましいが、地形などの制限により並列空間の前面に十分なスペースがない場合は横並びする建築をひとつずつ継時的に観賞しながら全体像を把握する場合も含む。

対称空間構成

この構成は、対称軸を挟んで向き合う両者はその質において同一者ではなく、実と虚のような対照の質をもっていることが指摘できる。つまり、対称空間構成においては中心軸を挟み相同な空間の器が配置されるが、その中に代入される空間は対照的な質をもつものといえる。これは西洋や中国の完全性の象徴としての対称空間とは異質であり日本に固有の特質といえる。

円環空間構成

この構成は、経路がループを描くため、経路上に奥は発生しない。従って、経路上に核心となる建築を置く必要もなく、各建築に明確なヒエラルキーが生じない。また、自らが描くループによって、ループの内側領域と、外側領域という2つの領域を形成する。

第3章 日本における自然信仰を根に据えた「祈りの空間」の構成

この章では、第2章で取り上げた3つの基本的な空間構成をもとに、自然信仰を根に据えた日本における「祈りの空間」を対象とし、空間構成の分析を行う。

3-1.山の信仰を根に据えた「祈りの空間」の構成

ここでは山の信仰を根に据えた「祈りの空間」の構成の分析を行う。例は金刀比羅宮と吉備津神社、長谷寺を挙げる。

金刀比羅宮

1.境内の空間と構成

金刀比羅宮の神体山である「象頭山」の尾根は北西から南東に伸びる。

境内は一之鳥居を起点としており、まっすぐと伸びる石段上に大門、桜馬場、金刀比羅宮表書院がつづき、二度の屈折を経て旭社、さらに屈折して本宮となる。本宮では北に展望台、南に三穂津神社がある。展望台の奥は尾根に平行に奥社へと続く山道があり、

西側には象頭山とそれに背をむけていくつかの末社が鎮座している。山道は奥社まで続きそこが終点となる。また旭社、本宮を中核とする領域はループを描き円環をなす。

ここで、本殿前までの空間を「領域A」、本殿から奥社へ向かう道といくつかの末社がある領域を「領域B」、旭社と本宮を中核にループをなす領域を「領域C」とする。

「領域A」は一直線上に伸びる石段上に一之鳥居、大門、金刀比羅宮表書院と建築が配置されており、最奥部に本殿がある。それを順に辿る。屈折はあるものの、線形直列空間構成である。

「領域B」は奥社までに三つの末社がある。これらの末社はすべて象頭山の尾根を背に東面している。これら三つの空間は同一軸線上にあり、象頭山の尾根に平行している。奥社はこのルートの終点をなし向きも本宮向きで例外的であるが、本宮の右側にある拝殿は讃岐岩の急斜面にむけて配置されており、象頭山を向いている。これらの空間は広大な領域に配置されているため、同時に観賞することはできないが、象頭山尾根を背にして横並びする建築を全体的に把握することに本質があり、その意味で線形並列空間構成である。

「領域C」は旭社と本宮を中核にした円環空間構成を成している。また、「領域C」は「領域A」と「領域B」の二つの構成の中間地点にあり、両者をつなぐ役割も果たす。

2.地形の構成と空間構成の関係

金刀比羅宮の構成と地形の関係から全体空間を把握する。「領域A」の線形直列空間構成は、軸を伸ばすとその奥に象頭山山頂が位置する。次に「領域B」の線形並列空間は、

象頭山尾根に平行する軸線上に末社群が並列する。直列空間と並列空間という異質空間を円環が結びつけている（図3-1）

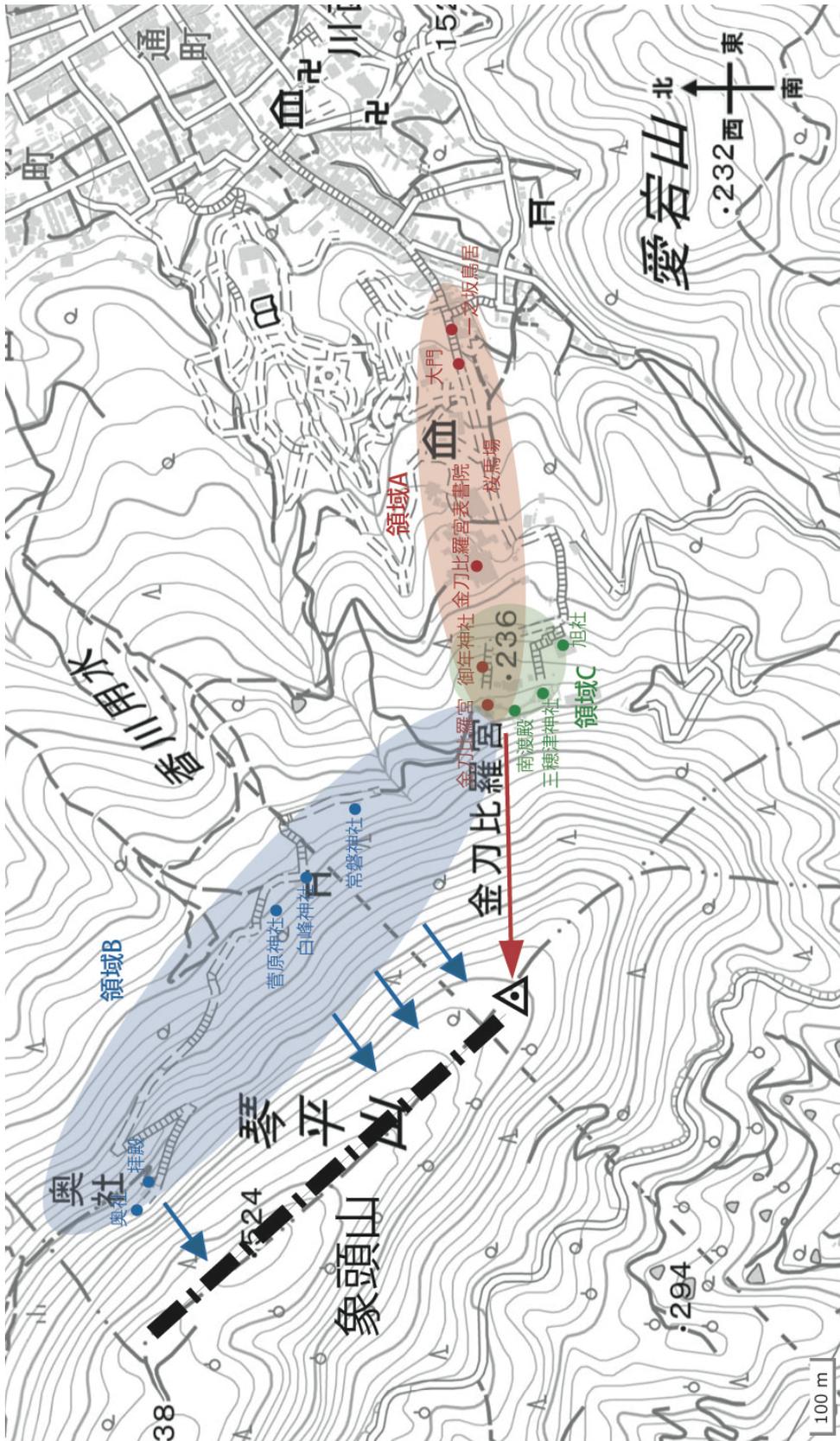


図 3-1 地形と金刀比羅宮の空間構成の関係

吉備津神社

1. 境内の空間と構成

境内は、神体山である吉備中山の西麓に位置している。吉備中山の尾根は南北方向に続き南端で谷を挟んで綺麗で独立した山容を見せる飯山が位置する。

境内は、北端の鳥居を起点に、南に伸びる石段上に北随神門、総拝殿が続き、石段を登り切った高台に拝殿と本殿が複合した大型社殿が鎮座する。

本殿の西側から南に向けてスロープ状の廻廊が走り、南随神門を過ぎると遙か南の末社本宮までおよそ四百メートルにも及ぶ距離を下降しながら伸びていく。この長大な廻廊の東側には、「吉備中山」があり、そこにいくつかの末社が山を背に鎮座している。廻廊は本宮社でとまり、そこで境内も終わる。

ここで北側の鳥居～本殿に至るまでの領域を「領域 A」、本殿から南に伸びる廻廊とその東に位置する末社群によって形成される領域を「領域 B」とする。

「領域 A」は、始点である鳥居から急傾斜の石段が伸び、北随神門、総拝殿、拝殿という四つの建築が直列し最奥部の核心をなす本殿へ誘導する。これは完全なる線形直列空間構成である。

「領域 B」は六つの末社がある。そのうち、南端の本宮のみは、南面しているが、残りの五つは全て「吉備中山」を背にして西面している。また、これらのうち、八幡宮、春日宮、大神宮の三社は三社宮とよばれ並列しているが、残りのえびす社、岩山宮は同一構成軸にない。しかし、それらは互いに、廻廊の南北軸に平行な軸を有しており層状の並列空間をなしている。このように見ると、「領域 B」は南北方向に伸びる長廻廊、その東に並列する末社群、さらにその奥には「吉備中山の尾根」が控えていることが分かる。従って、並列する末社群を継時的に見ながらも一つ一つの建築をつなぎあわせることによって最終的には同時に並列空間として全体像を把握することとなる。つまり、長廻廊を長大な拝殿とした線形並列空間構成と捉えることができる。

ここで、「領域 A」と「領域 B」において2種の構成の変換点をみる。すると「領域 A」から「領域 B」において長廻廊の軸がわずかの屈折しかみせず結合していることで線形直列空間構成の軸が線形並列空間構成と重なっており、2つの領域を滑らかなものになっていることがわかる。またその境界線上に吉備津神社本殿があり、この両構成を連結する。(直列を受け止める平面構成と並列をなす立面構成で両者の特性を併せ持つ)。

2. 地形の構成と空間構成の関係

吉備津神社の構成と地形の関係から全体空間を把握する。「領域 A」は線形直列空間構成であり、その最奥部に本殿が位置する。そしてこの軸線は「吉備中山」の数ある山のうち独立性が高く、美しい三角錐型をした山(=飯山)の山頂へと続く。次に「領域 B」の線形並列空間構成は、廻廊が拝殿でありその奥に並列末社群そして、「吉備中山の尾根」へ

と東西方向に続いていく。従って、「領域 A」は飯山山頂を神体山とした線型直列空間構成を成しており、「領域 B」は「吉備中山の尾根」を神体山に線型並列空間構成を成している。(図 3-2)

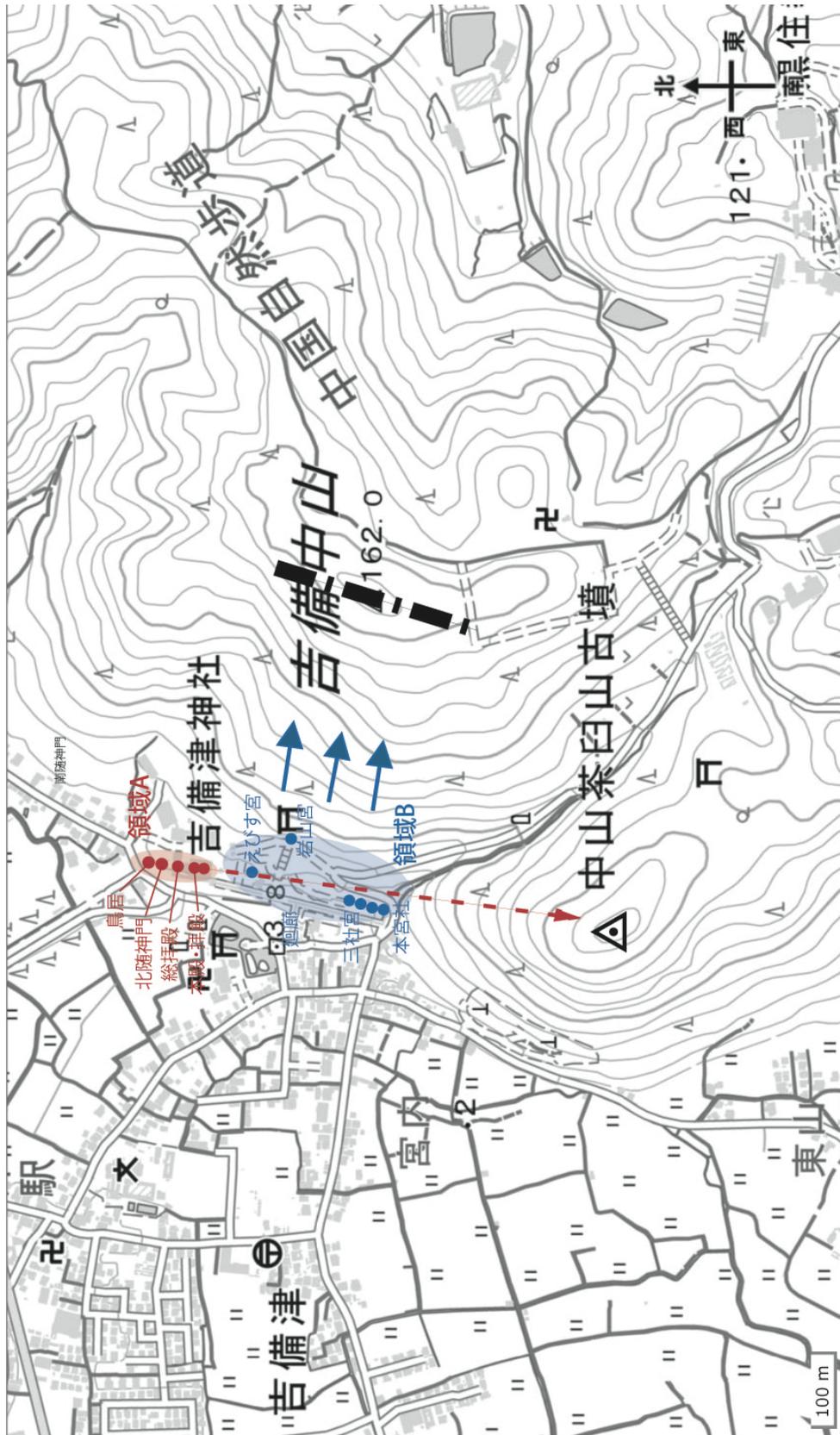


図 3-2 地形と吉備津神社の空間構成の関係

長谷寺

1. 境内の空間と構成

本堂のある南向き斜面（北嶺）と、五重塔や元長谷寺のある東向き斜面（西嶺）の双方に建築群が配置され境内を形成している。

境内の始点は参道から続く仁王門であり、ここを通るとすぐに登廊がある。登廊は3本あり、二度の屈折を経て参拝者を本堂まで導く。本堂には東面からアプローチし、舞台と内陣に挟まれたトンネル状の相の間へ入る。相の間では右側に闇の中に浮かぶ十一面観音像を拝し、左側に開放的な舞台がある。ここを過ぎると参道は北嶺から西嶺へと舞台を移し、ここでは木立の中に点在する五重塔や元長谷寺、奥の院といった小建築を送り迎えする。そして、最後は一つ目の登廊に至り、仁王門に戻る。

境内の全体空間は円環空間構成である。具体的には仁王門、登廊、本堂、元長谷寺や五重塔などの小建築、登廊、仁王門という円環である。しかし、同質の空間要素が円環上に並んではない。仁王門から本堂までは登廊の柱列によってパースが効いており、奥へと緊張感を伴いながら歩く空間となっている。一方、本堂を過ぎると登廊によって限定された経路とは対照的な空間となる。それは自然風景に点景化した小建築を見ながら歩くといった遊山的空間である。

ここで、「北嶺」側の仁王門から三つの登廊を経て本堂に至る領域を「領域A」、「西嶺」側の本堂を過ぎて遊山的空間となる領域を「領域B」とする。

「領域A」と「領域B」の二つの領域の間には谷筋がまっすぐと走る。また、この谷筋に重なるように一つ目の登廊が位置している。よって、一つ目の登廊を対象軸とし、その両側に「領域A」と「領域B」を配置した対称空間構成であることがわかる。

ここで、「領域A」と「領域B」の空間の変換点となる本堂をみる。本堂はトンネル状空間の相の間によって二分される。二分された一方は十一面観音像を中核とする闇に満ちた求心的閉鎖空間であり、他方は吹き放しの多柱空間である外陣と舞台からなる明るい開放的空間である。このように、本堂は相の間を対称軸とした対称空間である。これを対称空間と捉えるならば、長谷寺の全体をなす対称空間をそのまま圧縮した空間が本堂となる。

以上より、全体空間をみる。長谷寺は円環空間構成と対称空間構成が複合すること、そして両側に対照的な空間を従える対称構成の中で円環をなすため、空間が捻転するかのよう感じられる。メビウスリングのような円環といえる。この現象を可能にしたのは空間の捻じれポイントに本堂があることである。対称的な二つの空間に引き裂かれる経験をへてその後、空間が変化する。これが「空間の捻じれ」として現象するのである。また、一つ目の登廊は全体の対称軸を成している。

2. 地形の構成と空間構成の関係

このように長谷寺は全体としてはメビウスリングのように「捻じれた」円環となって

いるわけだが、それは北嶺と西嶺という二つの領域が向き合いながら両者をつなぐように円環をなしていることに起因している。長谷寺は元来、元長谷寺という名前にあるように西嶺を聖地の基点としながら、後に北嶺へと信仰核を移したと言われている。従ってその新旧の聖地双方を対称空間として組織しながら円環でつないでいる。そしてその中心には対称軸として見え難く一つの登廊が貫いているのである。



図 3-3 地形と長谷寺の空間構成の関係

3-2.海の信仰を根に据えた「祈りの空間」の構成

ここでは海の信仰を根に据えた「祈りの空間」の構成について記す。事例として住吉大社と巖島神社を挙げる。

住吉大社

1.境内の空間と構成

境内は、平地であり、境内西側には大阪湾、東側にははるか先に聖山・信貴山が位置する。一直線上に反橋、鳥居、第三本宮、第二本宮、第一本宮が配置されている。一直線上に並ぶ建築群を進みながら観賞する。しかし、第三本宮～第一本宮は、平入りの建物を正面とし、その後ろに妻入りの建物が T 字のように複合されていることから、往路よりも第一本宮を見終え、帰路の方がより一直線上に並んでいることを意識できる。

構成は、一直線上に反橋、鳥居、第三本宮、第二本宮、第一本宮が配置されており、線形直列空間構成である。(図 3-4)

2.地形の構成と空間構成の関係

住吉大社の線形直列空間構成の軸線を、境内範囲を超えて延長すると、西には大阪湾、東には、信貴山山頂に達する。また、往路で見る直線軸よりも帰りに見る直線軸の方が強い線形直列空間構成を成していることから、住吉大社は信貴山山頂を陸の聖地とし、その聖地に背後から守護されながら、大阪湾という広大な海にむけて、船が隊列をなして漕ぎ出していくかのような線形直列空間構成をなしている。(図 3-5)



図 3-4 住吉大社の空間構成

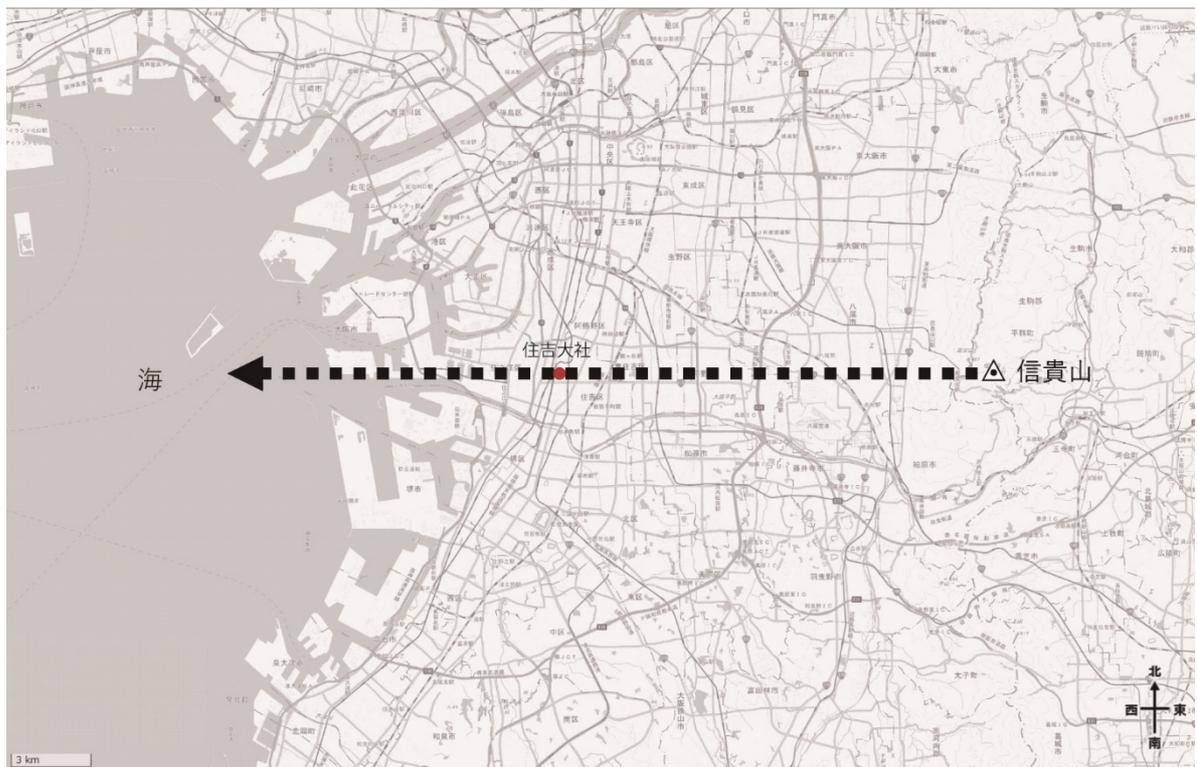


図 3-5 地形と住吉大社の空間構成の関係

巖島神社

1.境内の空間と構成

境内は安芸宮島の北側湾沿いに位置しており、潮の満ち引きする場所に回廊が浮かんでいる。境内背後の南西側には聖山・弥山がそびえる。

平安時代の寝殿造りの屋敷と池のうち、池が海に置き変わったような全体構成であり、海中の鳥居から平舞台、拝殿、本殿等を貫く中心軸と海に向いて開けた変形コの字の回廊からなる。北側の入口から回廊を進んでいくと本殿と相似形の客神社の拝殿と本殿の間を通り、2度の屈折を経て、中心軸にある平舞台が見え、海中の鳥居へと意識が向く。その後は鳥居から、祓殿、拝殿、幣殿、本殿という中心軸上の空間へと導かれ、次いで西回廊を辿ることで大国神社、能楽屋台等を通り対岸へと至る。

巖島神社は直交する二つの対称空間構成の複合であり、そのうちの主たる対称空間の中心軸が線形直列空間をなし、強い軸性を示している。また海中の回廊を巡り歩き、背後にある湾曲した陸路を通ることでループをなすことから円環構成をも形成している。以下には、これらの構成について一つずつ見ていくことにする。

まず対称空間についてである。これは平等院鳳凰堂の対称空間の在り方と同じものと考えられる。平等院鳳凰堂は実体としてはコの字型平面の厳正な左右対称空間である。このコの字は口の字のうちの半分の省略、あるいは消去によって生まれたものである。その結果できた空間はコの字の実体と、その手前に空虚があり、それらが前後で左右対称をなしている。巖島神社では、明確な中心軸をもつ変形コの字の実体がまず左右対称をなし、その手前には海と鳥居しかない空虚がある。1.実体の左右対称、2.実体と空虚の左右対称が直交している。なおこの空虚は鳥居があることで空虚側にも中心軸がつかぬいていることが可視化されており、それゆえに実体と空虚の対の関係が認識可能となっている。次いで円環である。入口から建物を継時的に鑑賞するが、明確な最奥部は存在せず、変形コの字の回廊を屈折しながら対岸に出る。こののちは社殿背後の湾の岸辺を巡り歩き、入口付近にもどってループをなす。円環ではあるものの、その半分は社殿群、残り半分は陸地であり、その空間の性質は大きく異なっている。なお陸地のルートにおいて、実体中心軸の最奥部（本殿の背後）には、禁足地を囲い込んだ「ひもろぎ」があり、その背面を見ることができる。

2.地形の構成と空間構成の関係

社殿は湾の上に変形コの字をなして浮かぶ。湾自体が広大な海を受け止める形をしているが、ここではコの字を建築空間で構成することで、受け止める形がより明瞭になっている。そしてコの字の中心軸を本殿、幣殿、祓殿、平舞台が貫き、海上の鳥居にまで伸びることで、陸から広大な海に向けてむかっていくことが可視化されている。これは住吉の直列社殿群と同じ空間効果をなしている。

次に、陸地の聖地・弥山との関係である。住吉大社とは違い、中心軸を延長しても、聖山・弥山山頂には達しない。中心軸から45度南西に振った方向に弥山山頂はある。ここで禁足地「ひもろぎ」が重要な役割をしめる。「ひもろぎ」は、矩形に結界された空虚であり、この空虚は神を招き降ろす空間とされている。従って、巖島神社の奥の院が鎮座する弥山山頂から「ひもろぎ」へ神を招き降ろし、「ひもろぎ」を基点に海へと線形直列空間構成を成している。ここでは実体でなく「ひもろぎ」による空虚が実空間だけでは構成不可能な役割を担っている。日本建築における空虚や余白の重要性がここでも示されている。(図3-7)



図 3-6 厳島神社の空間構成

3-3.大地の信仰を根に据えた「祈りの空間」の構成

ここでは大地の信仰を根に据えた「祈りの空間」の構成について記す。事例として生島足島神社と延暦寺根本中堂を挙げる。

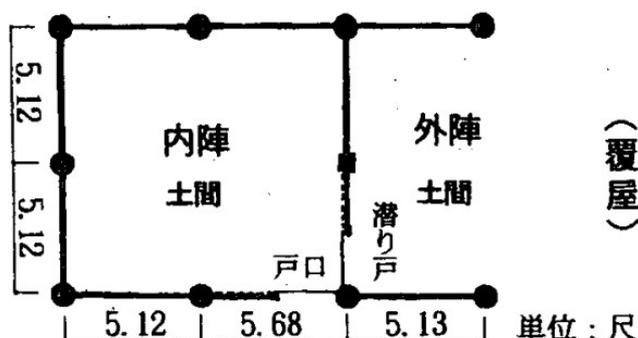
生島足島神社

境内の池に囲まれた小島の中に本殿が正面を北西に向けて建っている。内陣は床板がなく大地そのものを御神体として祀られている。土間を内陣とする本殿が元来の本殿ではあるが、江戸時代末期からその外側に覆い屋が設置され現在に至っている。結果として、本殿の内部に入れ子的に旧本殿が内包され、現在旧本殿は内殿と呼称されている。古来、神事が神秘ごととされ内殿は公開されない。江戸末期から続く入れ子構成は秘められた空間という性質をより強めている(図 3-8)。

御神体が大地そのものである神社本殿はまれではあるが、寺院における仏の場所=内陣の下に諸仏があらわれた岩や大地を内包する本堂は山岳信仰の寺院に数多く見られる。これらの事例は、日本において大地信仰が普遍性をもつことの表れと言える。

延暦寺根本中堂

天台宗総本山、比叡山延暦寺の中核をなす本堂である。全体構成は中堂と、その前に回廊で囲まれた中庭が位置する、興福寺式の伽藍配置である。中堂へは回廊正面の中門から入り回廊をたどって入堂する。根本中堂において、仏の場所である内陣は石敷きの土間である。一方、内陣を拝する外陣や中陣は板の間であり、土間よりは2.5m高い位置にある。内陣は蠟燭の光のみの空間であり仄暗い。中陣から拝する土間空間は「底なし」のような様態であり畏怖の念を禁じ得ない。拝する場所と、大地である土間の高さを変えることで、大地への畏怖を空間経験として体験できるようになっている。秘所として隠される大地とは違い経験される大地の信仰空間である。



3-4.日本における自然信仰を根に据えた「祈りの空間」の特質

ここでは日本における自然信仰を根に据えた「祈りの空間」の特質をまとめる。

山の信仰を根に据えた「祈りの空間」の構成

金刀比羅宮と吉備津神社は山頂に対して線形直列空間構成、山の尾根に対して並列空間構成を形成していた。山を原信仰とした「祈りの空間」は山頂に対して線形直列空間構成を成し、尾根に対しては線形並列空間を形成するという特質をもつといえる。二つの空間の結び目には円環、あるいは両空間の性質を併せ持つ建築が挿入されることで全体空間として統合されている。

長谷寺は信仰核とする新旧の山が谷を挟んで向き合っている。この場合は谷を中軸とする対称空間構成を形成している。さらに二つの領域を対照的な空間としつつ、円環空間構成によって一つの「祈りの空間」へと統合されている。

海の信仰を根に据えた「祈りの空間」の構成

住吉大社や厳島神社の線形直列空間構成は背後に揺るがない信仰核となる山の山頂や、「ひもろぎ」を置き、それに守護される形で陸を基点に海へとまっすぐ向かっている。海を原信仰とする「祈りの空間」は広大な海に対して背後に揺るがない核心を置き、陸を基点に線形直列空間を形成することが特質だといえる。厳島神社においては線形直列空間を対称軸にする実体がなす左右対称と、実体と海側の空虚がなす左右対称が、直交して成立する（平等院鳳凰堂と同じ構成を有する）空間であり、海に浮かぶ空間と陸地の空間が円環をなして統合されたものである。住吉大社と比較すると基礎構成が幾重にも複合した複雑な空間構成を有している。

大地の信仰を根に据えた「祈りの空間」の構成

生島足島神社では床板がない大地そのもの御神体としている。大地を御神体とする宮殿と、その覆い屋である本殿が入れ子をなし、神事も神秘として公開されない。徹底して隠すことが意図されている。一方で根本中堂は仏のいる内陣が土間（＝大地）であり、拝所である外陣中陣は一層分高い板敷きの空間である。中陣から底の見えない仄暗い空間を見下ろすという空間経験は、大地への信仰を畏怖ともに体感させる。空間経験として大地への祈りへの実現を目指す本設計においては根本中堂のあり方を参照することが有効だといえる。

以上が日本における自然を原信仰核とする「祈りの空間」の特質である。また、日本における自然を原信仰とする「祈りの空間」では複数の基本構成が複合する場合、その構成同士の変換点で構成を連結させるための空間（＝連結空間）があることが共通の特質となる。

第4章 日本における凝集された「祈りの空間」の構成

この章では、日本における凝集された「祈りの空間」の分析を行う。凝集された「祈りの空間」は、巡礼空間を一建築に凝集したものである。これは2種に大別され、水平的に凝集するもの(=羅漢堂型)と、垂直方向に凝集するものがある。垂直方向への凝集はさらに2種に分類できる。一つは水平に凝集した空間を3つに分解して積層させる3階建てのもの(=積層型)であり、もうひとつは二重螺旋スロープで立体的円環をなすもの(=二重螺旋型)である。これらは江戸時代にさまざまな地域で同様の型を持つものがつくられており、標準的な設計がなされていることが指摘できる。

4-1. 水平凝集-羅漢堂型の空間構成

ここでは水平凝集された「祈りの空間」の分析を行う。事例として羅漢寺五百羅漢堂を挙げる。

五百羅漢堂

五百羅漢堂はコの字型の左右対称空間であり、南面する本堂を中心に相同な大きさの西羅漢堂と東羅漢堂が翼廊のように対になって配置される(図4-1)。概念図は図のようになる。(図4-2) 外観は平等院鳳凰堂に酷似している。

巡礼経路は本堂から西羅漢堂を巡り見て、そのうち本堂の裏のトンネル状の空間を通り、東羅漢堂を巡り、再び本殿にもどるとい一方通行で一筆書きの順路となっている。また、各空間には羅漢像が配置されており、建物を巡ることで、五百羅漢の全てを参拝できる。建物全体として内部空間はループをなし、円環空間構成となっている。

4-2. 垂直凝集の空間構成

ここでは、垂直凝集された「祈りの空間」の分析を行う。積層型の事例としては曹源寺栄螺堂と成身院百体観音堂を、栄螺堂型の事例としては会津若松栄螺堂を挙げる。

a. 積層型の空間構成

曹源寺栄螺堂

現存する栄螺堂の中で最古かつ最大規模のものである。一階に秩父三十四礼所、二階に坂東三十三礼所、三階に西国三十三礼所の観音像を配置している。各階において右回り一方通行で各観音を円環状に巡拝したのち階段を登り上階に行く。これを3層分繰り返して百観音を拝観した後、三階の高欄から周囲を展望する。最後に直線的に一気に1層まで階段を降りて巡拝を終える。一階から時計周りに一回転しながら三階へとあがる。3つの円環空間構成が積層された空間である。(図4-3)

成身院百体観音堂

外観は重層屋根の堂舎であるが、内部は3階建である。曹源寺栄螺堂と同様、一階に秩父三十四礼所、二階に坂東三十三礼所、三階に西国三十三礼所の観音像を配置している。内部空間構成も曹源寺栄螺堂と全く同じであり、3つの円環空間構成が3層に積層された空間である。

この二つの事例から、外観に差異はあるものの、内部空間構成は全く同じであり、標準化された設計であることがわかる。

b. 二重螺旋型の空間構成

会津若松栄螺堂

六角形の平面を持つ塔状の建築である。塔外周には螺旋スロープが取り付く。

巡拝経路は二重螺旋スロープで構成される。正面入り口から時計回りに一回転半上ると頂上に設置された太鼓橋に到達する。太鼓橋を渡ると今度は反時計回りに一回転半下り背面出口からでることができる。二重螺旋のチューブ状の空間である。

この建物は西国三十三観音所を安置しており、これを巡ることで巡礼が完了できる。二重螺旋をなす円環空間構成である。ただし、頂部の太鼓橋は特異点であり、これを境に回転方向と昇降方向が反対になる。(図 4-4)

二重螺旋型のものは会津若松栄螺堂しか現存しない。青森に現存する栄螺堂は八角平面ではあるものの、一回転半スロープで上昇して頂部に至るところまでは会津若松栄螺堂と酷似するが、頂部から下層へは梯子で降りねばならず、不完全である。



図 4-1 五百羅漢寺の内観¹⁾

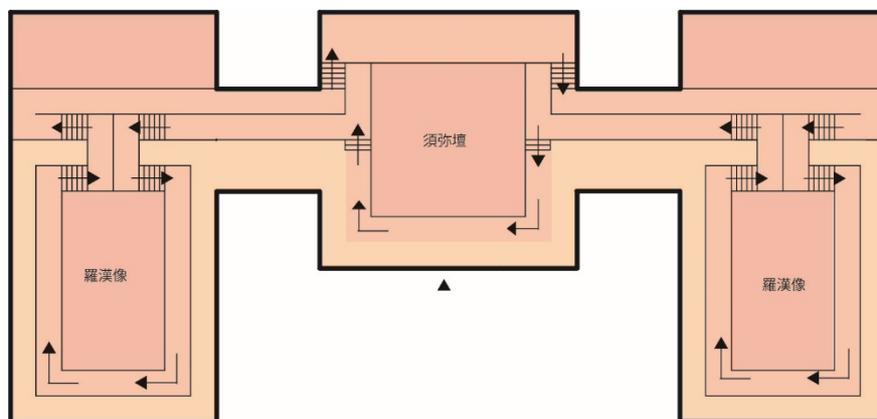


図 4-2 羅漢堂の概念図

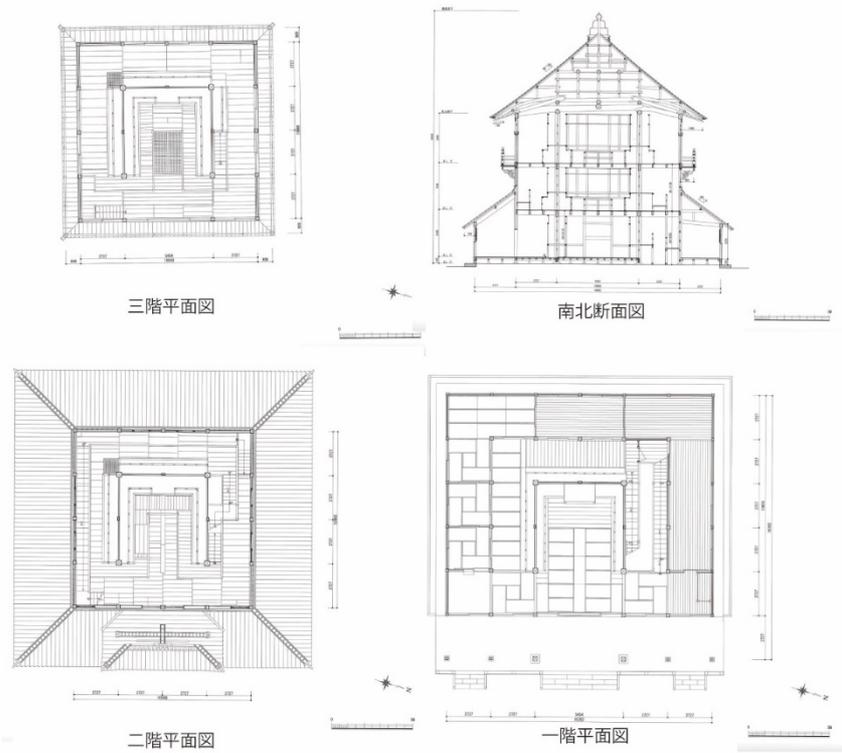


図 4-3 曹源寺栄螺堂の平面図・断面図¹²⁾

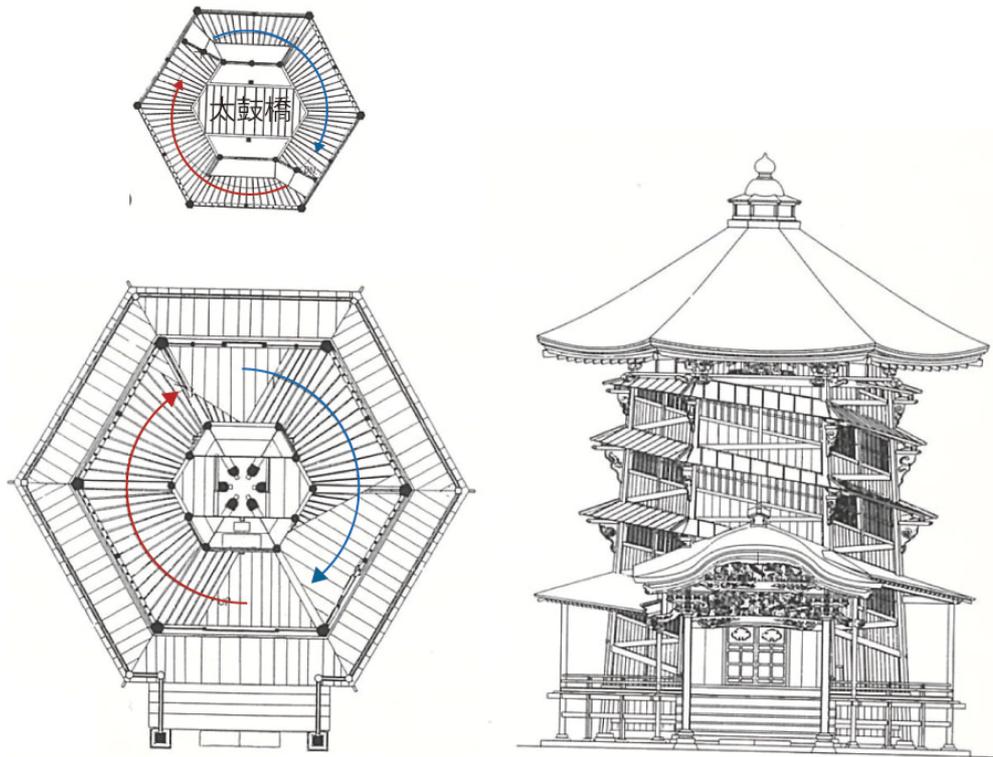


図 4-4 会津若松栄螺堂の平面図・断面図⁸⁾

4-3. 日本における凝集された「祈りの空間」の特質

ここでは日本における凝集された「祈りの空間」の特質をまとめる。

水平凝集-羅漢堂型の空間構成

羅漢堂型においては東西羅漢堂それぞれで円環をなしながら全体としても一方通行による円環空間構成をなす。そして東西羅漢堂が左右対称のコの字空間であること、外観が平等院鳳凰堂に酷似していることも重要な特質である。

垂直凝集-栄螺堂型の空間構成

a. 積層型の空間構成

3つの円環空間を積層して3層にした構成を持つ。水平凝集の3空間を垂直に積層させただけであり、垂直空間としての発見性には乏しい。ただし最上層が望楼的な空間となることについては垂直空間を長らくもたなかった日本の建築の中で、当時新鮮さを持つものとして喜ばれたことが推察される。

b. 二重螺旋型の空間構成

円環空間構成を二重螺旋化させて、水平面の積層ではなく、スロープによって立体的に滑らかな円環構成としているところに大きな特質がある。また頂部の太鼓橋を交換点に右回りから左回りへと、そして登りから下へと変化することも、この空間の重要な特質である。

以上が日本における凝集された「祈りの空間」の特質である。また、日本における凝集された「祈りの空間」においては日本の「祈りの空間」の円環空間構成を巡礼空間として抽象凝集させていることが大きな特質である。羅漢堂型の本堂裏のトンネル空間、栄螺堂型の最上層の太鼓橋や望楼的空間が、円環の中間地点で質の違う空間を結びつけていることも重要である。全体として円環でありながら、質の違う空間へと変転することは第3章で扱った事例に通じる空間特質である。しかしながら、これらの空間は自然を排除した空間であることに注意する必要がある。凝集された「祈りの空間」は広大な巡礼空間を高度に集約した建築であり、その構成手法は単一空間で形成する都市型「祈りの空間」に適用することが極めて有効である。ただし、ここでは自然が排除されているため、凝集された「祈りの空間」は、日本における「祈りの空間」としては亜種にとどまることを忘れてはならない。

第5章 日本における都市型「祈りの空間」の設計条件と設計指針・手法

ここでは日本における都市型「祈りの空間」の設計条件、設計指針、設計手法について記す。5-1の日本における「祈りの空間」の設計の前提では、第3章の分析をもとに改めて日本における「祈りの空間」の概要を記すとともに、設計条件を記す。5-2では日本における都市型「祈りの空間」の設計指針を記し、5-3では、設計指針に従った設計手法を具体的に述べる。

5-1. 日本における「祈りの空間」の設計条件

・日本における「祈りの空間」の概要

日本における「祈りの空間」は自然信仰を根に据えている。神社は山や海などの自然に寄り添う形で境内を形成しており、寺院においても山岳霊場などは山に寄り添って形成されている。第3章では、それらの「祈りの空間」の具体例を示した。ここでは改めてその具体例を踏まえ元来の日本における「祈りの空間」とはどのような空間なのか記す。

最も分かりやすい例として信仰核に神体山を据える「祈りの空間」を挙げる。まず、神体山を最奥部に据えて、鳥居を起点に奥へ奥へと向かっていく構成である。鳥居を過ぎて橋を渡り、参道を抜けると境内へ至る。境内には拜殿、本殿が直列して並ぶ。その背後には神体山がある。これが日本における「祈りの空間」の基本形である。(図5-1)吉備津神社や金刀比羅宮、住吉大社などがこの形式に当てはまる。この基本形がさらに古式になると本殿にあたる空間が禁足地(=入ることができない空虚)となる。(図5-2)禁足地は神体山の聖性を強化する役割をもつ。巖島神社や大神神社などが当てはまる。また、禁足地のような聖なる空虚を備えた「祈りの空間」もある。伊勢神宮の古殿地や平等院鳳凰堂の池にある空虚である。伊勢神宮は本殿地と古殿地による対称空間、平等院鳳凰堂は実体と池を中心とした空虚との対称空間をなす。これらは古代に起源を持つ空間構成であることから、日本において根の深い「祈りの空間」だとわかる。空虚は実体と並置されることで形作られる(実体がないと空虚を感知できない)。そして空虚が信仰対象である自然の聖性を高める。実体と空虚の対称空間において、実体が隣りあう空虚を強調し、空虚(禁足地)が自然信仰の聖性を強化する。虚実の対称空間という構成手法は、日本における「祈りの空間」の、古代起源の手法であり、本設計においても有効であると考えられる。

日本における自然信仰を根に据えた「祈りの空間」の基本形
(ex. 吉備津神社、金刀比羅宮、住大社)

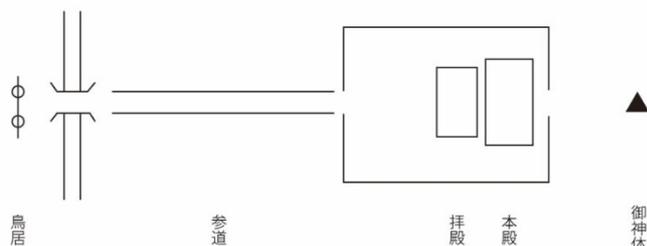


図 5-1 日本における自然信仰を根に据えた「祈りの空間」の基本形の概念図

日本における自然信仰を根に据えた「祈りの空間」の古式
(ex. 大三輪神社、厳島神社)

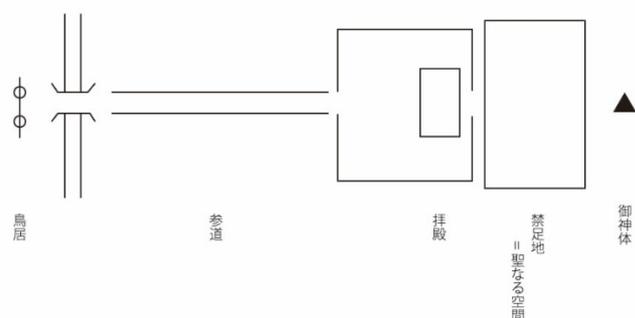


図 5-2 日本における自然信仰を根に据えた「祈りの空間」の古形式の概念図

・日本における都市型「祈りの空間」の設計条件

日本における都市型「祈りの空間」の設計を具体化するにあたり、設計条件を設定する必要がある。それを以下に示す。

設計条件 1：雑多な都市において聖なる空間を「切り取る」こと

設計条件 2：切り取られた聖なる空間にて空と大地の聖性を強化すること

- ① 強化する手法として実体と空虚の対称空間を導入すること
- ② 実体に空と大地を拝する空間（空之拝所と大地之拝所）を導入すること

設計条件 3：切り取られた聖なる空間を内包する「祈りの空間」が、都市内の限定された敷地において成立するように単一建築に集約化されること

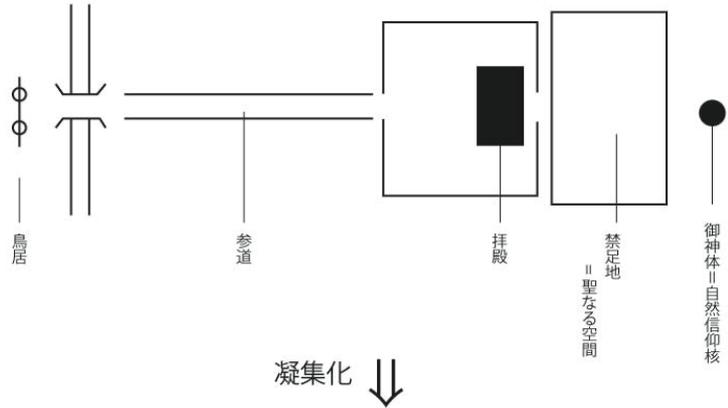
各設計条件について具体的に記す。設計条件 1 は雑多な都市において聖なる空間を区別できるように「切り取る」ことである。一般に現代都市空間は俗なる空間が無限に折り重なっている。この状況の中で聖なる空間を作り出すことは難しい。そこで雑多で俗なる空間から、限定された空間を切り取ることで、俗空間からの隔離を図る。設計条件 2 は切り取られた空間によって空と大地の聖性を強化することである。日本における都市型「祈りの空間」では空と大地を自然信仰の核に設定するが、信仰核に据えるだけではそれほどどこにもある空と大地にすぎない。そのため空間を切りと

り、空と大地を限定することで、これらが信仰核であることを認識できるようにする。幣で結界を張られた空地が、聖なる空間になるのは結界によってであり、本設計の「切り取り」も結界と同じ効果を持つ。具体的には①実体と空虚の対称空間を導入し、実体を、具体的な内部空間を持つ拝所とし、空虚を、空と大地に通じる禁足地とする。②拝所では上部に空を拝する空間（空之拝所）を、下部に大地を拝する空間（大地之拝所）を導入する。設計条件3では、切り取られた聖なる空間を内包する「祈りの空間」を、単一の建築として集約化させる。都市のさまざまな敷地に組み込むことを可能にするための、必須条件といえる。

・日本における「祈りの空間」から都市型「祈りの空間」へ

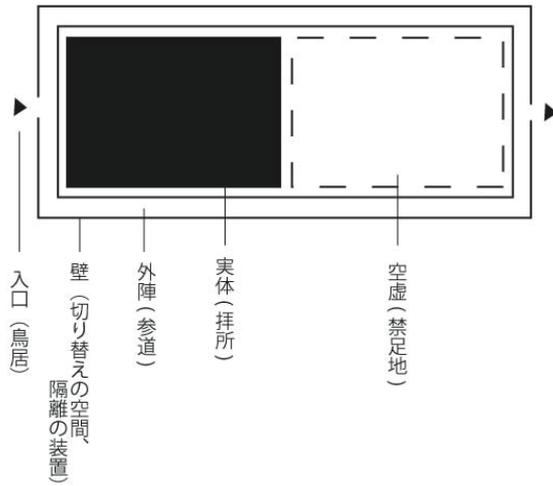
ここでは日本における「祈りの空間」を、都市型「祈りの空間」に変換する手法について記す。その概念を図示すると（図5-3）のようになる。自然の信仰核は大地と空である。日本における都市型「祈りの空間」においては、鳥居が建築の入口にあたる。入り口は矩形四面に設置された俗界を隔離する壁のうち、短辺方向の壁の、中央下部に穿たれる。そこを入ると聖域を隔離している壁の中に参道空間がある。参道空間は口の字をなし、その内側には矩形の空間がある。ここには拝所にあたる実体と禁足地にあたる空虚が対称空間をなして構成される。禁足地の空虚は上部で空、下部で大地に通じ、その聖性を高める。ここまでは鳥居を起点に神体山に至る、参拝者の礼拝順路に沿って、空間を記述した。以下には、「祈りの空間」の成立順序に従った記述をおこなう。日本における「祈りの空間」は、自然信仰核のみの空間を起点とし、そこに寄り添うように禁足地を設け、その手前に拝殿を設置し、境内空間を成立させてきた。そののち、参道を定め、聖域の最も外周部に鳥居が設置される。都市型「祈りの空間」では空と大地を聖なる信仰核に定め、禁足地である空虚がその聖性を高める。空虚と並列して拝所が備わり、禁足地と拝所が境内となる。この空間をとりまくように参道を据えられ、参道の起点が入り口となる。このように、「祈りの空間」の成立順序にも呼応するように都市型「祈りの空間」が構成される。このことは都市型「祈りの空間」では、日本における「祈りの空間」の、古代から近世に至るまでの成立過程も含めて、集約化されていることを意味している。

日本における「祈りの空間」の古式概念図



凝集化 ↓↓

日本における都市型「祈りの空間」の平面概念図



日本における都市型「祈りの空間」の断面概念図

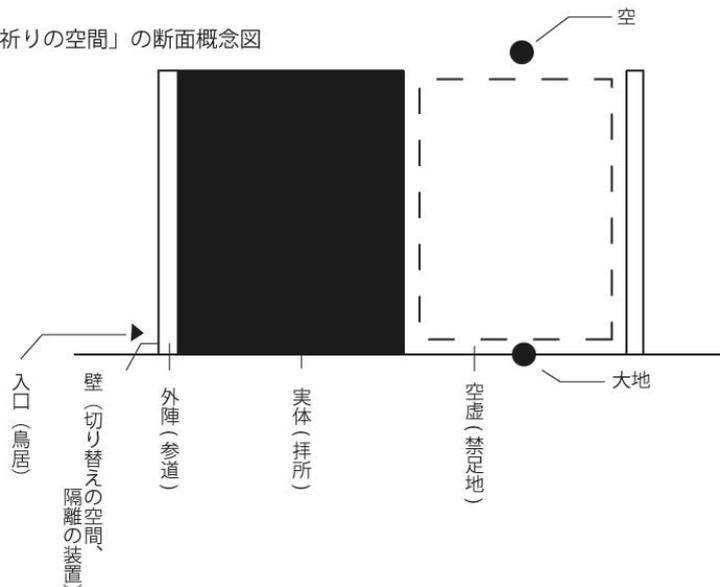


図 5-3 日本における「祈りの空間」から日本における都市型「祈りの空間」への変換概念図

5-2. 日本における都市型「祈りの空間」の設計指針

5-1 をもとに、日本における都市型「祈りの空間」の設計指針を以下に記す。

設計指針 1：空と大地を自然信仰の核に設定し都市から空間的に切り取る。

設計指針 2：実体と空虚の対称空間を設定し、空と大地の聖性を強化する

設計指針 3：実体の空間を拝所、空虚を空と大地に通じる禁足地に設定する

設計指針 4：拝所は上下にあり上を空之拝所、下を大地之拝所とする

設計指針 5：自然信仰を根に据えた「祈りの空間」の構成を基にした空之拝所、大地之拝所を構築する。

設計指針 6：実空間の全体は空之拝所と大地之拝所を上下の核に持つ凝集された「祈りの空間」として構成する。

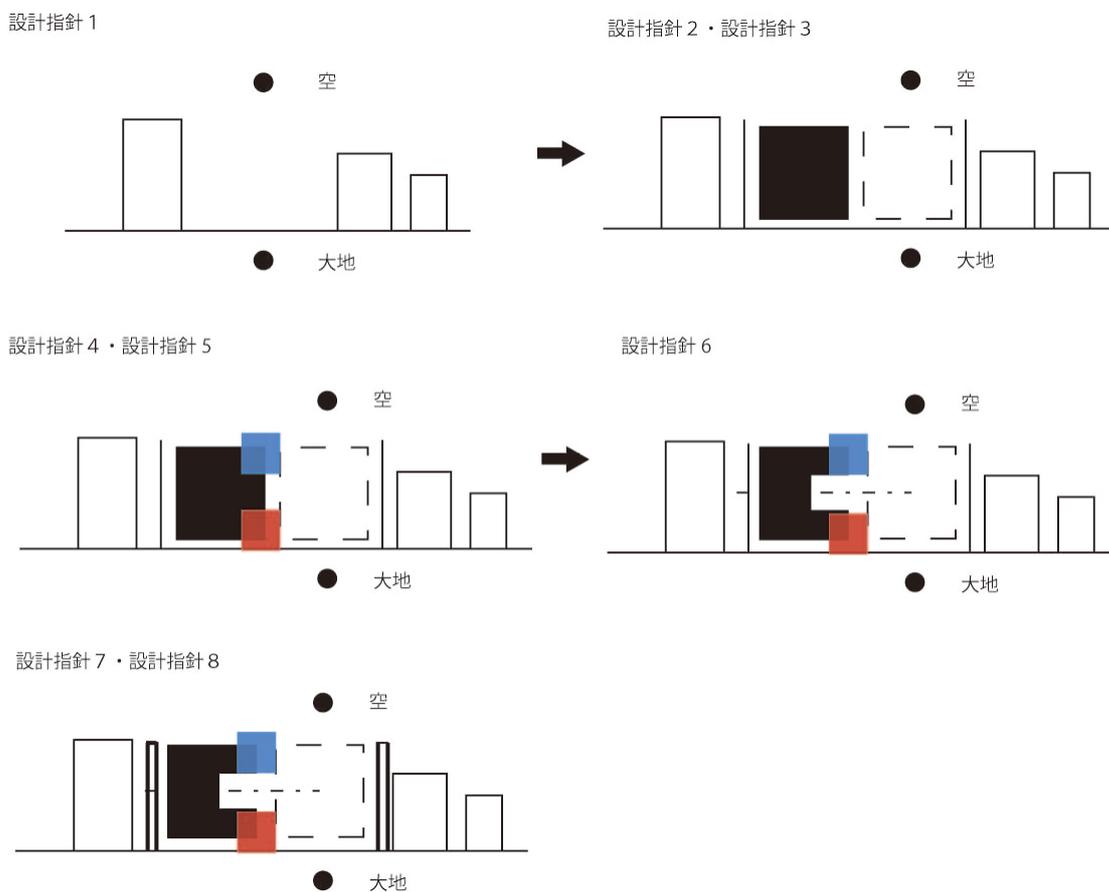
設計指針 7：実空間（拝所）と虚空間（禁足地）の対称空間を内陣とし、その外周を囲うように外陣を設定する。

設計指針 8：外陣は参道を担い、ここにも凝集された「祈りの空間」の構成を導入する。

各設計指針について詳しく図解（図 5-4）とともに示す。設計指針 1 では、空と大地を自然信仰の核に設定している。空と大地は、山や海、巨石などと違い、地面がありさえすればどこにでも存在する自然である。これにより場所を問わず、かつ、自然信仰が可能な空間構築ができる。次に、設計条件 2 を満たす指針として設計指針 2～5 がある。具体的には設計指針 2 で実体と空虚の対称空間を設定し空と大地の聖性を強化する。そして設計指針 3 で実体の空間を拝所、空虚を空と大地のある禁足地に設定する。実体と空虚の対称空間は、日本で古代から形成されてきた聖なる空間の構成手法であるとともに、空虚を禁足地とすることは、それよりさらに古式の空間形式である。自然信仰核と、古代の「祈りの空間」の構えがこの時点で成立する。また空と大地を拝す場所として設計指針 4 で上下に拝所を設定し、上を空之拝所、下を大地之拝所とする。設計指針 5 では二つの拝所の空間が、自然信仰を根に据えた「祈りの空間」の構成を基に構築されることが記されている。このことにより、自然に寄り添いながら、古代から近世にかけて編成と統合を果たしてきた、日本における「祈りの空間」の構成手法のエッセンスを導入することが可能となる。最後に設計条件 3 を満たすための指針として設計指針 6～8 がある。設計指針 6 で凝集された「祈りの空間」により実の空間を構成する。また、設計指針 7 で実空間と虚空間の対称空間を内陣としてその外周を外陣とする。そして外陣にも設計指針 8 で凝集された「祈りの空間」を導入することで参道を集約化する。凝集された「祈りの空間」は、近世に成立された高度に集約された巡拝空間である。これは自然信仰を根に据えないことから「祈りの空間」亜種と呼べるものである。ただし、古代から近世にかけて成立した「祈りの空間」の建築的工夫を一建築に集約する構成手法は他に例をみないものであり、都市型「祈りの空間」という限定された空間で巡拝をおこなうことにおいて、その導入には大

きな利点がある。

以上、自然信仰核の設定を起点に参道形成に至る、「祈りの空間」成立の順序に対応した設計指針を立てることができた。



図

5-4 設計指針の図解

5-3. 日本における都市型「祈りの空間」の設計手法

設計指針に対応する日本における都市型「祈りの空間」の設計手法を具体的に記す。

設計手法1：空と大地を自然信仰の核に据え、聖なる空間として都市から切り取る。

具体的には四周を壁で囲われた箱型空間によって切り取りをおこなう。

設計手法2：空と大地の聖性を強化するために実体と空虚の対称空間を形成する。

具体的には箱型空間のうち、半分を実体ある建築、残り半分を空虚とし、この両者が対称をなすように構成する。

設計手法3：実体の空間を拝所、空虚を大地と空のある禁足地に設定する。

設計手法4：拝所は上下にあり上を空之拝所、下を大地之拝所とする。

設計手法5：山（尾根）と海を信仰核に据える「祈りの空間」の構成をもとに、空之拝所を、大地を信仰核に据える「祈りの空間」の構成をもとに大地之拝所を設計する。空之拝所は空＝仰ぎ見る広大な空間とし、山＝仰ぎ見る存在、海＝広大な空間とし、この両者の複合として捉えている。

設計手法6：実空間の全体は羅漢堂型の空間を垂直に再編成して形成する。これにより大地之拝所と空之拝所を上下の核に持つ巡拝型の「祈りの空間」として構成する。

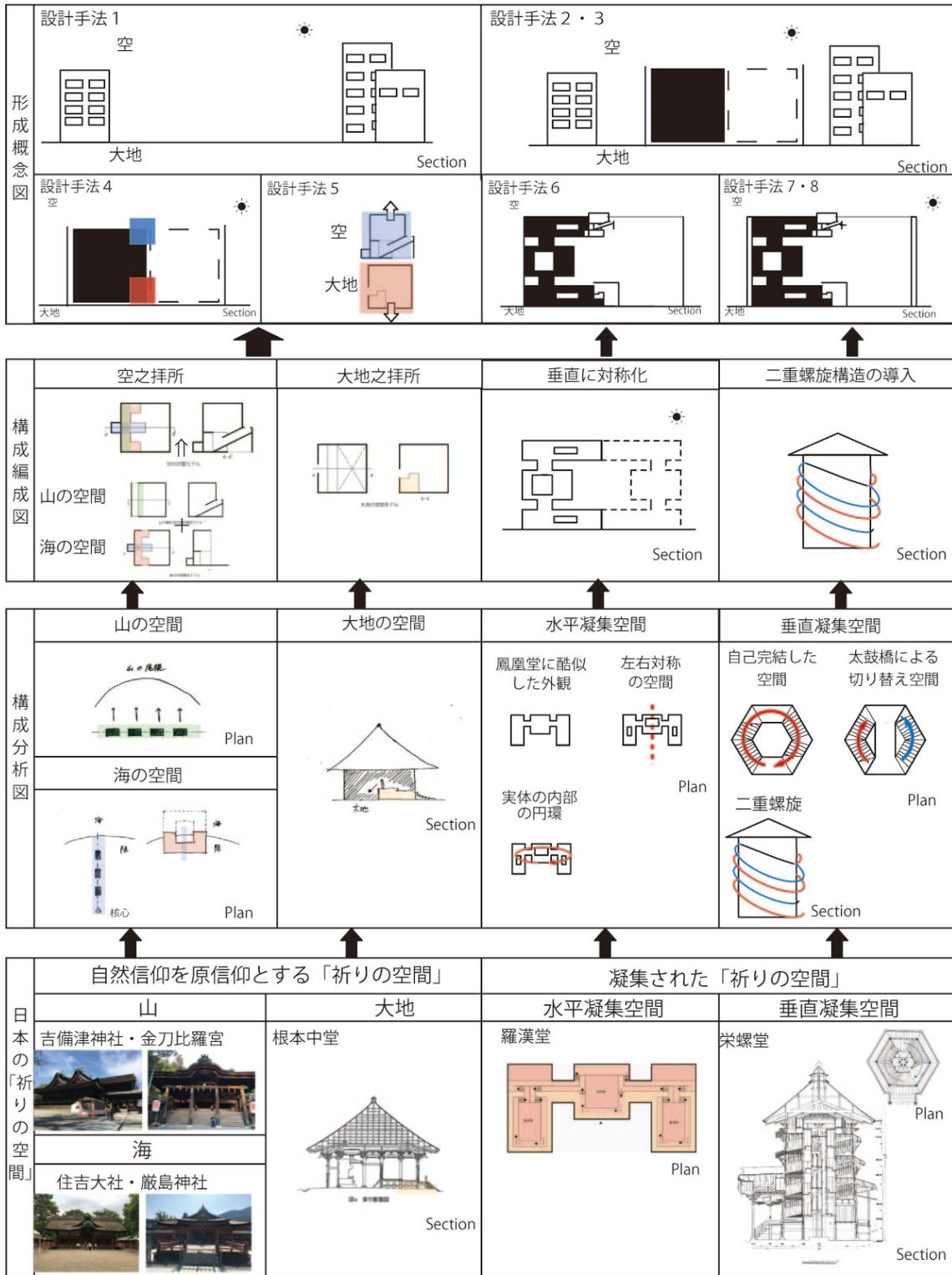
設計手法7：実空間（拝所）と虚空間（禁足地）の対称空間を内陣とし、その外周を囲うように外陣を設定する。

設計手法8：外陣は栄螺堂型を用いて羅漢堂型の入口につながるよう構成する。

上記の設計手法について設計手法ダイアグラム(図 5-5)と共に説明する。設計手法1では空と大地を自然信仰の核に設定する。都市において、空と大地を見失うことが無いように、雑多な都市空間から聖なる空間を矩形平面で切り取るとともにその四周に壁を回して隔離する。設計手法2では空と大地の聖性を強化する手法として実体と空虚の対称空間を形成する手法を用いる。具体的な内部空間で構成される実の空間に対して、空っぽな空虚の空間は、その対照の強さから、何もないことが際立ち、そこを介して空と大地に通じることで、空と大地の聖性がより高まっていく。設計手法3では設計手法2でできた空間にて実体の空間を拝所、空虚を禁足地として設定する。設計手法4では拝所の上下に空と大地を拝するための空間として空之拝所と大地之拝所を設ける。空之拝所と大地之拝所の設計については設計手法5として定める。空之拝所に関しては空を信仰核にする「祈りの空間」がないため、空＝仰ぎ見る広大な空間とし、仰ぎ見る自然として山の尾根を信仰核とする「祈りの空間」を、広大な自然として海を信仰核とする「祈りの空間」の構成を採用する。具体的に山の尾根を信仰核とする「祈りの空間」は、尾根に対して仰ぎみるように信仰できるよう並列に建築を配置した並列空間構成と上方を仰ぎ見る経験を取り入れる。参考にしたのは吉備津神社、金刀比羅宮である。海を信仰核とする「祈りの空間」は、前方に広がる広大な海を受け入れるコの字空間を採用する。また信貴山や弥山といっ

た陸上の信仰核を基点に、海に向けて一直線上に配置された直列空間構成も取り入れる。参考にしたのは巖島神社と住吉大社である。大地之拝所は大地を信仰核とする「祈りの空間」として延暦寺根本の空間構成をそのまま用いる。設計手法6では実空間内部に複雑な巡拝空間を集約するとともに、二つの核を左右対称にもつ空間形式を有することから羅漢堂型を採用する。二つの核を左右対称にもつ特質を垂直に変換すると二つの核を上下対称にもつ空間に変換可能である。これにより、先に構築した上の核：空之拝所と、下の核：大地之拝所を無理なく結合させることが可能である。また、内陣が虚実の対称空間をなすことを考慮すると、羅漢堂型の建築が平等院鳳凰堂の外形と酷似することが活用できる。平等院鳳凰堂が虚実の対称空間をもつためである。設計手法7では実空間（拝所）と虚空間（禁足地）の対称空間を内陣とし、その外周を囲うように外陣を設定する。そして設計手法8で外陣に栄螺堂型を導入する。本設計における外陣機能は参道である。ここに栄螺堂型の特質を導入する。具体的には螺旋状の参道で、羅漢堂型の実之内陣垂直中央部に導くとともに、そこからの帰路としての螺旋状参道を導入する。結果として往路帰路で二重螺旋を描き、そのつなぎ目の空間（栄螺堂の太鼓橋にあたる空間）として羅漢堂型中央部が位置することとなる。

以上により日本における都市型「祈りの空間」が完成する。



Section

図 5-5 設計手法ダイアグラム

第6章 日本における都市型「祈りの空間」の設計内容

ここでは、日本における都市型「祈りの空間」の設計内容をまとめる。

6-1. 日本における都市型「祈りの空間」の解剖図解：各部名称とその概略

設計物の各部名称と、設計にあたって空間構成を導入した日本における「祈りの空間」との関係解剖図解として示す。(図 6-1) まず、都市型「祈りの空間」の各部名称である。断面内側の矩形が内陣、その外周部が外陣である。内陣において、実之内陣と虚之内陣が対称構成をとる。実之内陣はコの字型断面をなし、中央部が零之間、そこから上下対称をなし、上の翼廊に空之拝所、下の翼廊に大地之拝所が設置される。上下の拝所は実之内陣と虚之内陣の境界（内陣空間の中央位置）に位置し虚之内陣を拝む向きに配置している。虚之内陣は禁足地であり、上で空に、下で大地に通じていく。外陣は参道空間としての機能をもつ。次に、各部空間に導入された日本の「祈りの空間」を示す。空之拝所は上の極の青色の点線で囲われた部分である。この空間は山を信仰核に据えた「祈りの空間」と海を信仰核に据えた「祈りの空間」の複合であり、山の「祈りの空間」は、代表的参考例として吉備津神社を、海の「祈りの空間」の参考例は巖島神社と住吉大社としている。大地之拝所は下の極の赤色の点線で囲われた部分である。この空間は延暦寺根本中堂の空間構成をそのまま採用している。都市型「祈りの空間」として単一建築に巡拝空間を集約的に導入するため二つの凝集された「祈りの空間」を導入している。羅漢堂型はオレンジ色の部分である。水平対称のコの字から垂直対称のコの字にすることで空と大地に対応する空間へと変転されている。栄螺堂型は外陣の緑色で塗られた部分である。参道として内陣の周りを囲むように配置している。往路と帰路では逆回りの螺旋を描き、栄螺堂と同様の二重螺旋空間が実現されている。

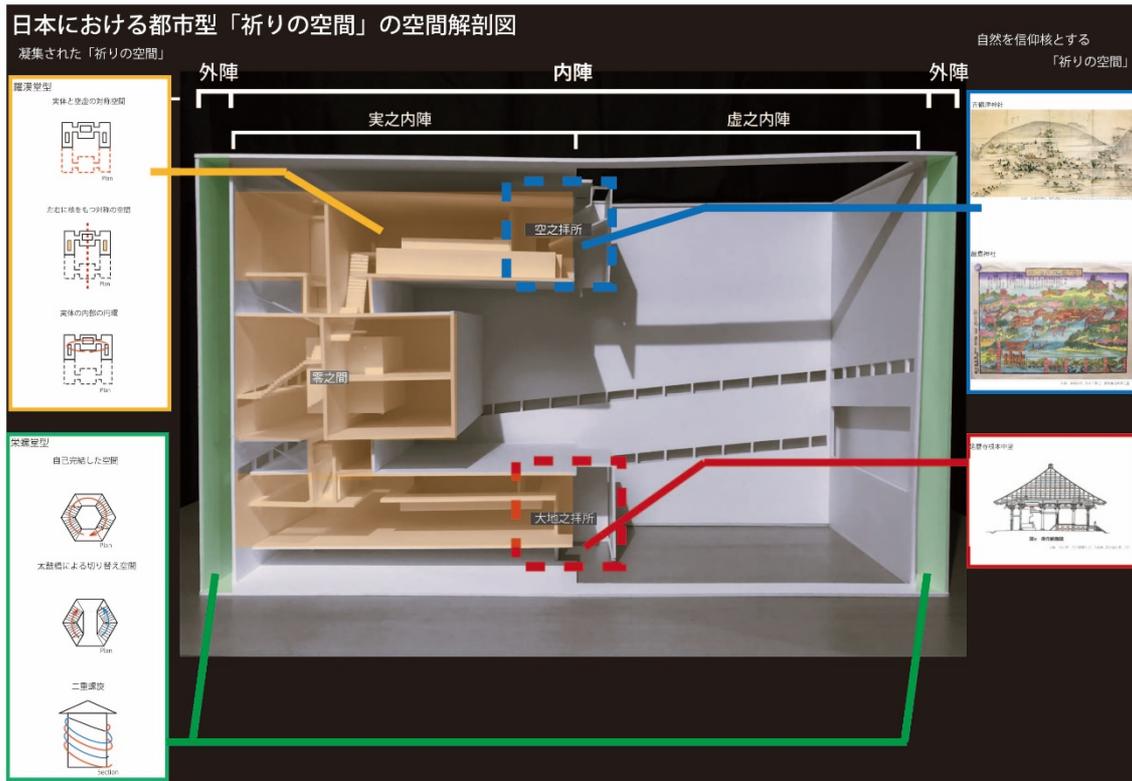


図 6-1 日本における都市型「祈りの空間」の空間解剖図

6-2. 日本における都市型「祈りの空間」の配置計画

都市の配置条件として入口を南側、出口を北側とする。またこの条件により虚之内陣が南側に、実之内陣が北側に位置することとなる。実之内陣の空之拝所から拝む上方からの光が時刻とともに変化していくことが強く意識されている。往路と帰路の交錯を避けるために南北に位置する街路に挟まれた敷地とし、入口側が出口側よりもメイン道路であることを条件とした。ここでは北海道、東京都、京都府、高知県の4都道府県において配置パターンを提示する。(図 6-2)(図 6-3)(図 6-4)(図 6-5) 幾つかの都市で配置パターンを提示したのは都市型「祈りの空間」が都市の違いに関係なく、設定した条件に合致するように設置可能であることを示すためである。

北海道

Google マップ

<https://www.google.co.jp/maps/@43.0652419,141.3517011,496m/data=!3m1!1e3?hl=ja>

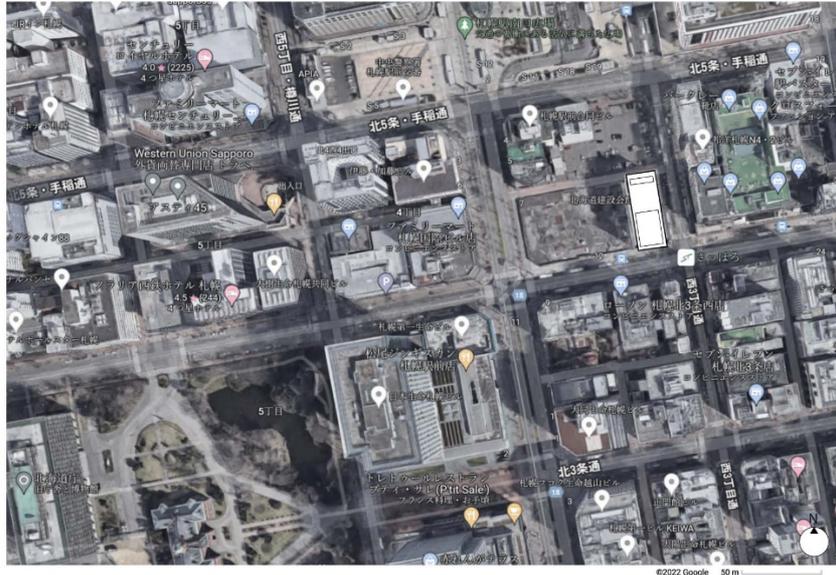


図 6-2 北海道における日本における都市型「祈りの空間」の配置図

東京都

<https://www.google.com/maps/@35.6836494,139.7718754,495a,35y,347.83h/data=!3m1!1e3>

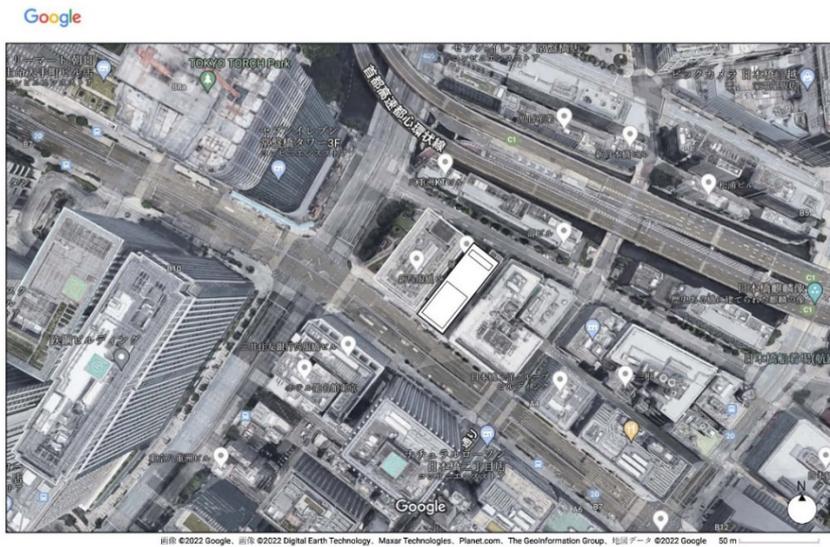


図 6-3 東京都における日本における都市型「祈りの空間」の配置図

京都府

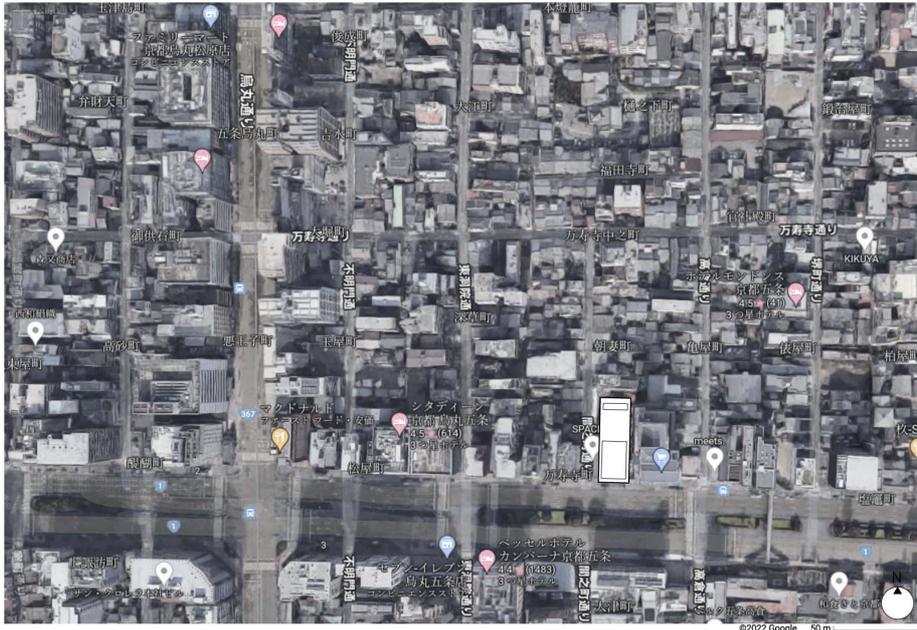


図 6-4 京都府における日本における都市型「祈りの空間」の配置図

高知県

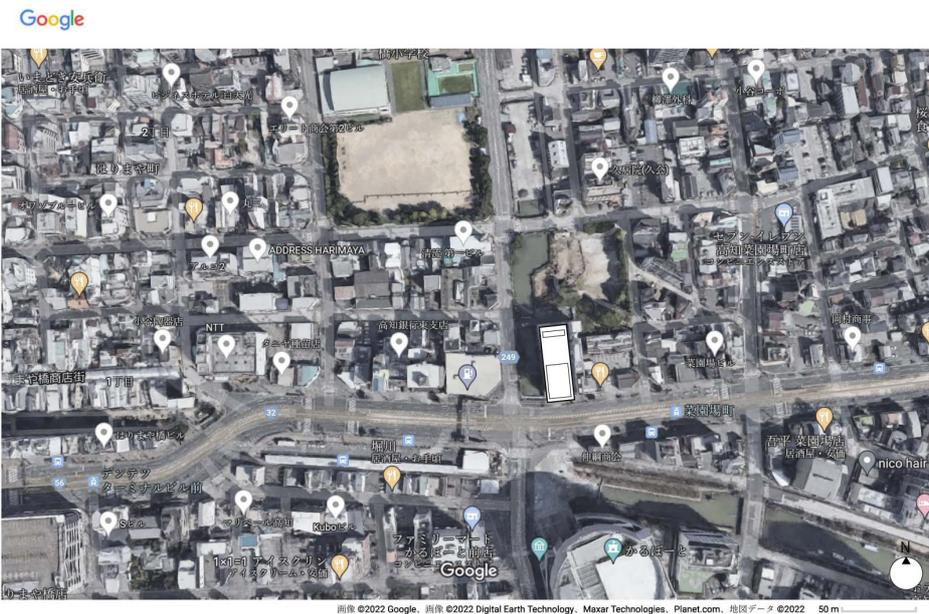


図 6-5 高知県における日本における都市型「祈りの空間」の配置図

6-3.日本における都市型「祈りの空間」の平面および断面計画

ここでは外陣と内陣の2つに大別して説明する。(図6-6)(図6-7)

外陣

外陣は、栄螺堂型の二重螺旋構造を内陣の外周に設計した空間である。この空間は、スロープ角度によって規定される平行四辺形のハイサイドライトを取り入れている。内陣には実之内陣（閉鎖空間）と虚之内陣（上下開放空間）がある。そのため実之内陣側が暗く、虚之内陣側が明るいといった明暗の差が生まれ実体と空虚を示唆した空間となる。下りの参道では、虚之内陣側にある大開口により大地と空を直視することができる空間としている。この空間を経験することによって内陣が実体と空虚から成り立っていることを把握できる。

内陣

内陣は北側を実之内陣、南側を虚之内陣とした空間からなる。また、羅漢堂型を垂直に対称化していることで、実之内陣は上から空之拝所、零之間、大地之拝所の順で構成されている。これにより、羅漢堂型の水平方向の巡礼は階段による垂直方向の巡礼へと変化する。水平空間では変化に乏しい移動が、空に向けては上昇、大地に向けては下降という行動へと変転する。このことにより、空と大地を拝する行為がその方向性ととも強調されることとなる。虚之内陣は空虚である。以下では空之拝所、零之間、大地之拝所について詳しく説明する。

空之拝所は、海を信仰核とする「祈りの空間」と山の尾根を信仰核とする「祈りの空間」が複合した空間である。海を信仰する空間から踏襲した構成は陸側で海（広大な広がり）を受け取るコの字型空間を形成し、次いでコの字を貫く中心軸を空虚に向け一直線に伸ばすことで大なる広がりへと漕ぎ出す気持ちを誘導する。山を信仰する空間性としては、空虚を仰ぎ見る断面構成を導入している。この二つを複合して空之拝所の空間としている。断面計画では空を見せず上方から射す光によって自然と仰ぎ見る経験となるよう計画した(図6-8)。これにより、広大な空を仰ぎ見る経験となり空を信仰することができる空間としている。

零之間は、平面、断面の中央に位置する正方形平面の空間である。この中核にある立方体は、明暗の空間の中で見ることによって空を示唆する光と大地を示唆する暗闇の両空間の中心になる空間とした。具体的には床面を水平中心線とすると、中心線より上は光によって逆光となる立方体をみることができる。一方、中心軸より下は暗闇のなかでぼんやりと浮かぶ立方体をみる。これにより、零之間は床を水平方向の対称軸とする光と闇の空間となっている。

大地之拝所は、延暦寺根本中堂の構成をそのまま用いた。これにより拝所から暗闇の空間を見下ろすようにできている。またハイサイドライトを設け、拝所から地面をのぞき込むとぼんやりと薄暗い空間が底なしのように感じられるよう演出した。これは地面がないことへの畏怖を感じる空間であり、これにより地面＝大地があることの尊さを感じさ

せることが可能になる。

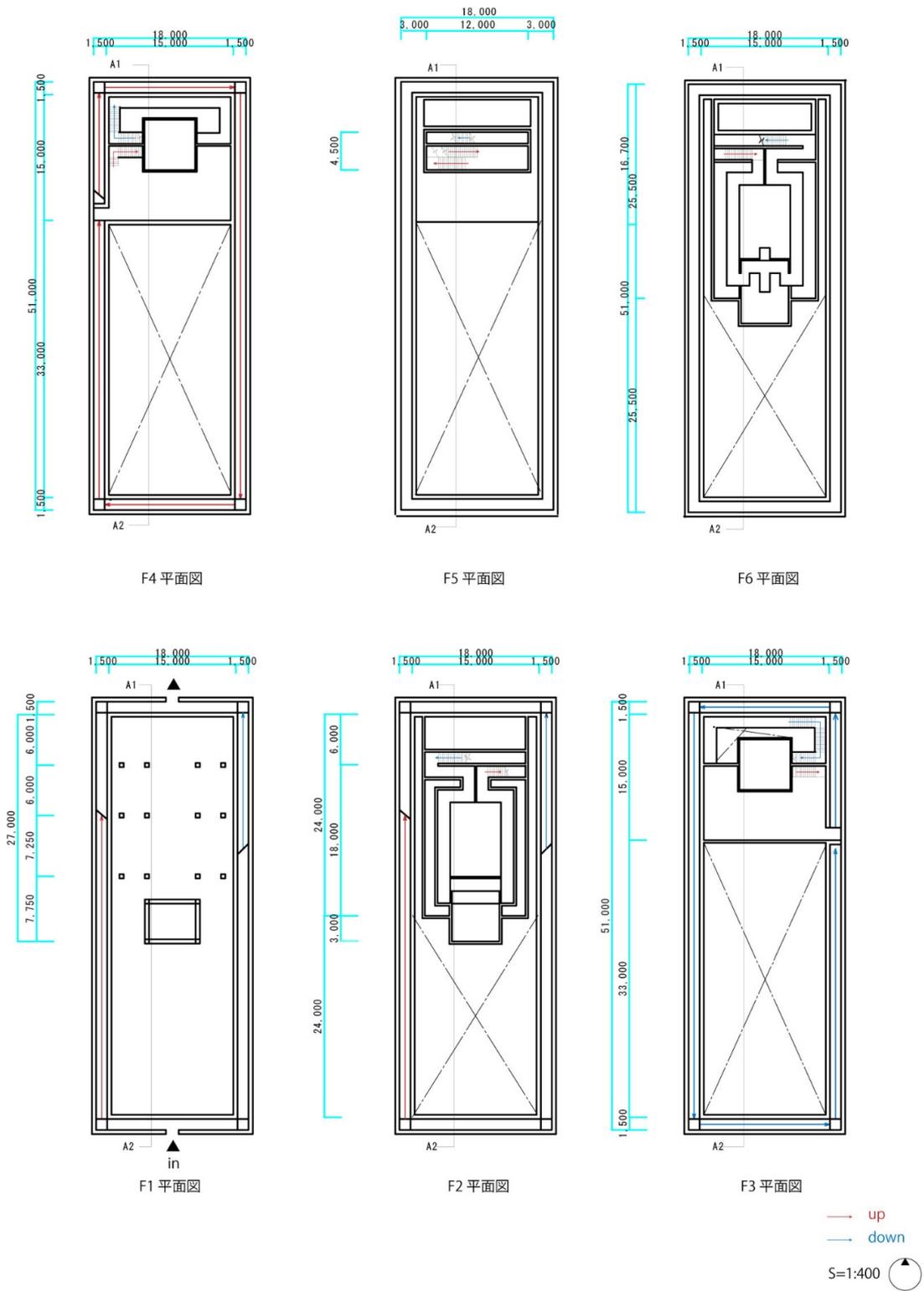
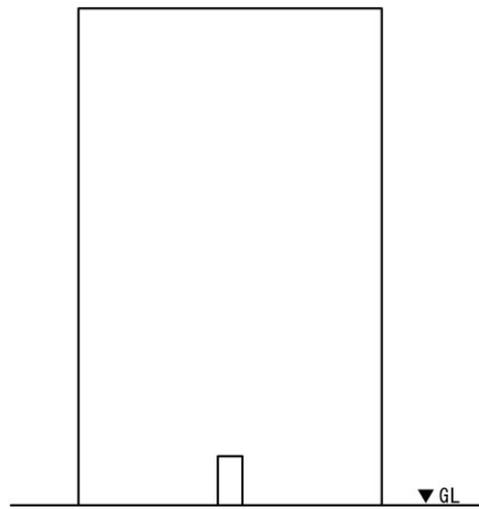


図 6-6 日本における都市型「祈りの空間」の平面図



S=1:400 

図 6-7 日本における都市型「祈りの空間」の断面図および立面図

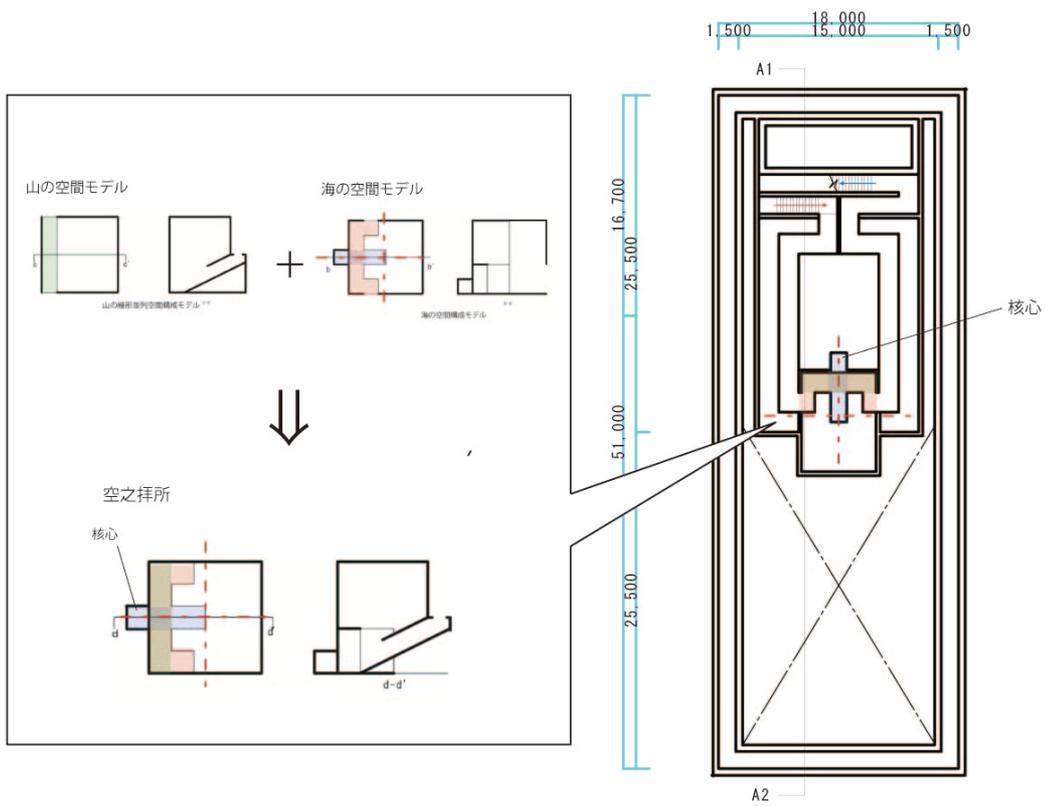


図 6-8 空之拝所の計画図

6-4.日本における都市型「祈りの空間」のシーケンス計画

まず、入口から零之間までの経路についてである。(図 6-9)入口を入る。外陣ではスロープの参道によって上る。(図 6-10) スロープを上りきると零之間に入る。(図 6-11)そして零之間から更に上ると空之拜所へとたどり着く。(図 6-12)空之拜所では上方の光により空を意識することができるようになっているが、空を直視できない空間としている。(図 6-13)その後空之拜所から大地之拜所に向けて下る。(図 6-14)天井にはトップライトが設けられることで上から下へと光が落ちる空間としている。空之拜所から大地之拜所へ降りていくに従って光の量は乏しくなり薄暗くなる。明から暗への変化とともに空と大地をつなぐ空間である。(図 6-15)大地之拜所は、暗い空間の中で底なしの地を見るという経験を通して大地を意識する。また、この空間も空と同様に大地を直視できないように計画している。(図 6-16)そして、大地之拜所から再び、零之間に戻る。(図 6-17)(図 6-18)その後行きと反対にある出口から、スロープで下る。(図 6-19)下りのスロープでは、虚之内陣側に開口を設けており、大地と空を直視することができる空間となっている。(図 6-20) (図 6-21) そののち、下り切り、入り口と逆側に設けられた出口から、都市の日常へと投げ出される。

以上がシーケンスの計画である。これらの空間経験を通して分かることは、実之内陣側では大地と空が見えない経験、虚之内陣では大地と空を直接見ることができる経験となっていることである。つまり、この空間は実之内陣による暗示された空間と虚之内陣による顕示された空間が対称と対照をなすことで、片方だけでは得られないことのできない、空と大地への祈りを、強く意識できるよう計画されている。

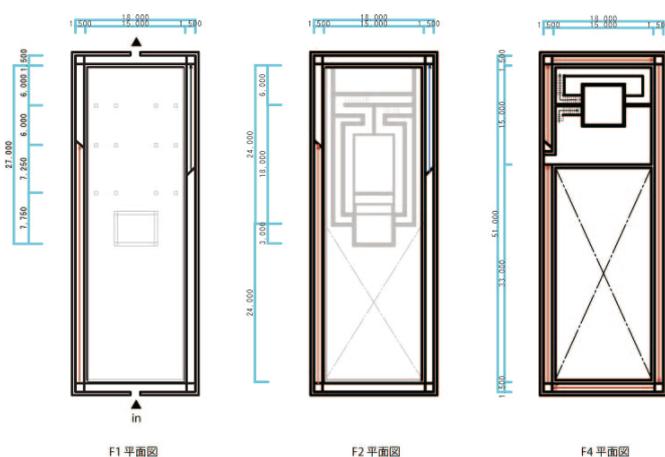


図 6-9 入口から零之間までの経路

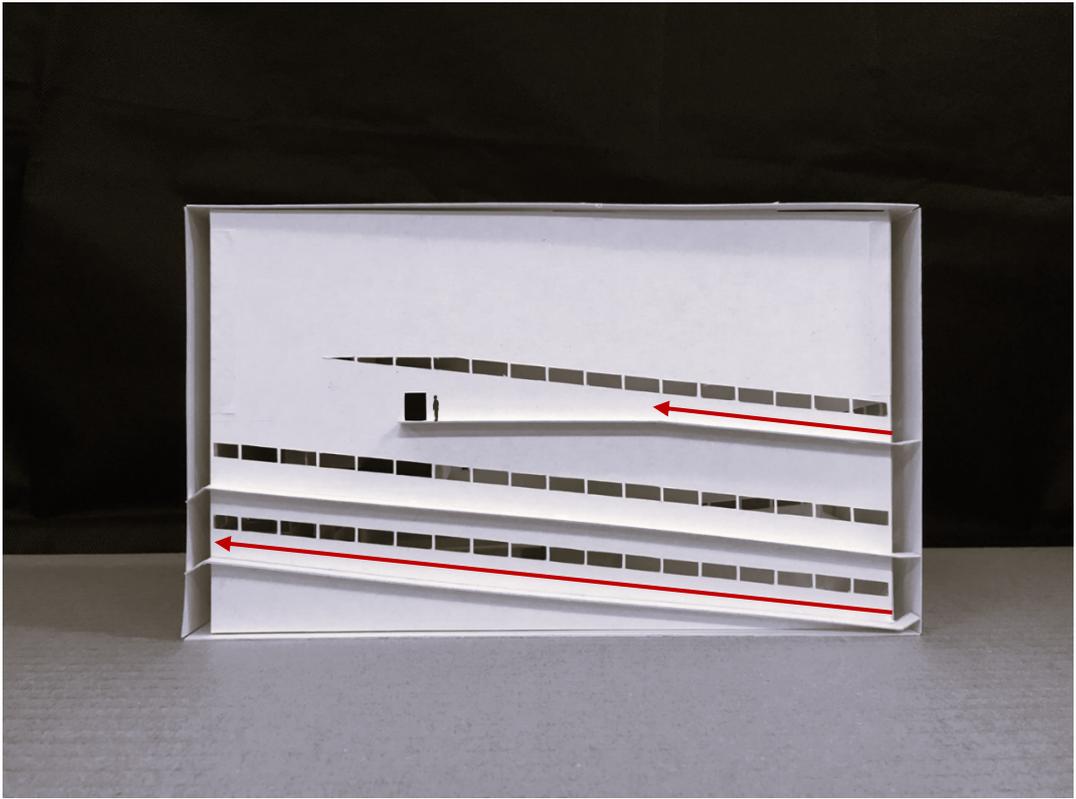


图 6-10 外陣



图 6-11 零之間

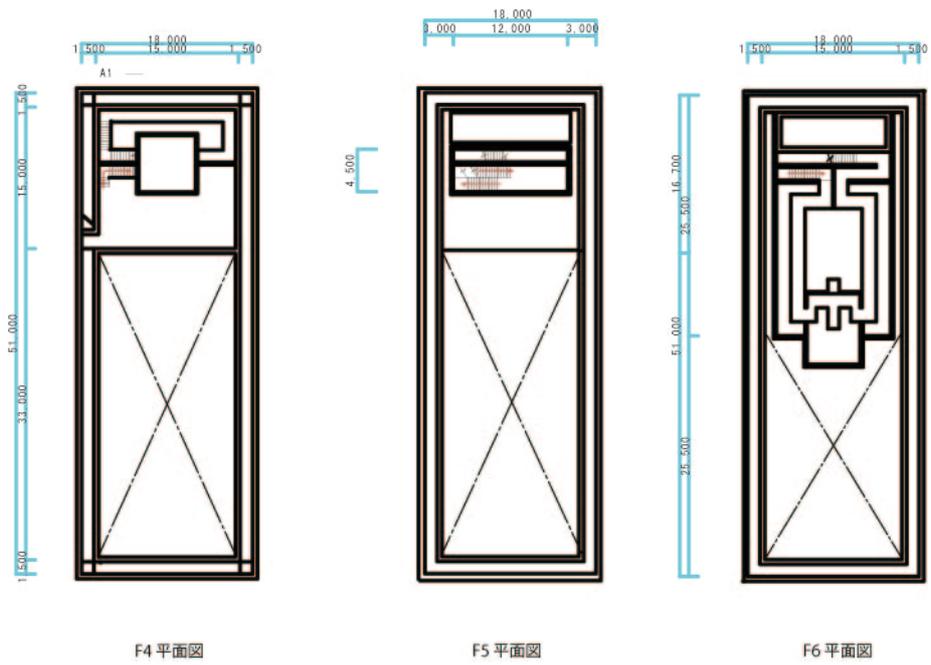


図 6-12 零之間から空之拜所までの経路

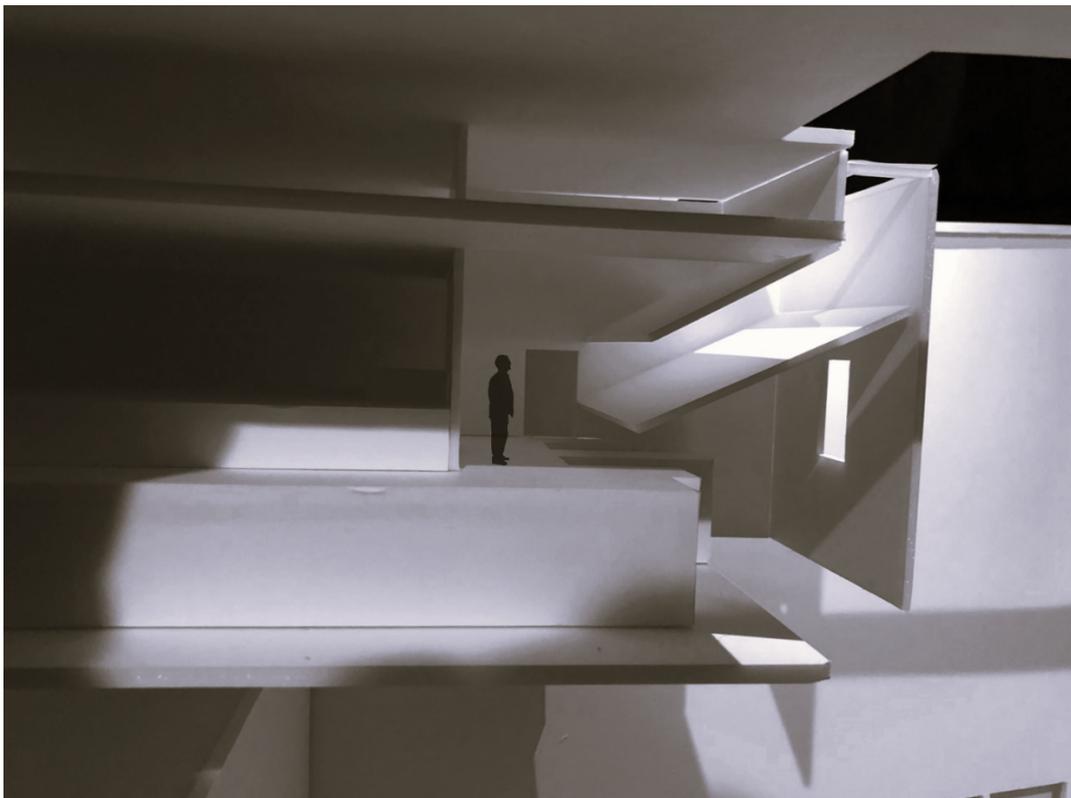


図 6-13 空之拜所

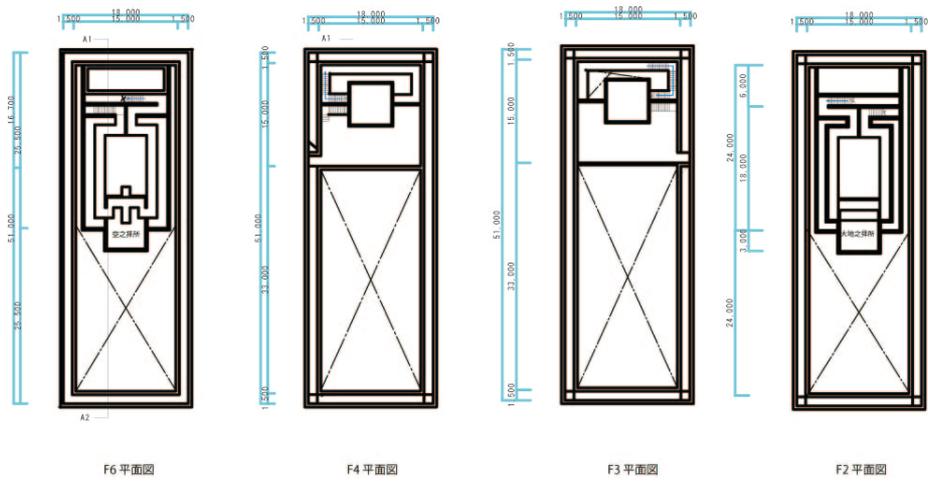


図 6-14 空之拝所から大地之拝所までの経路

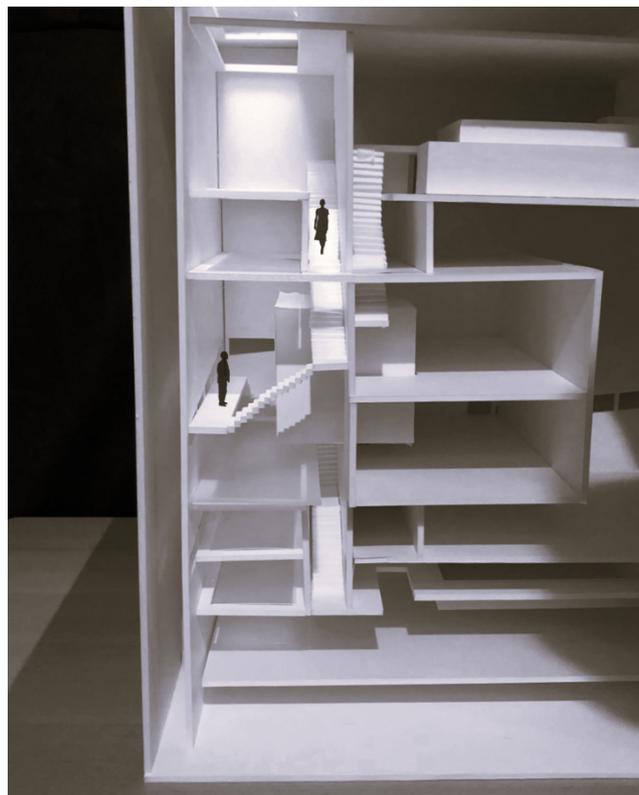


図 6-15 空之拝所から大地之拝所への移動

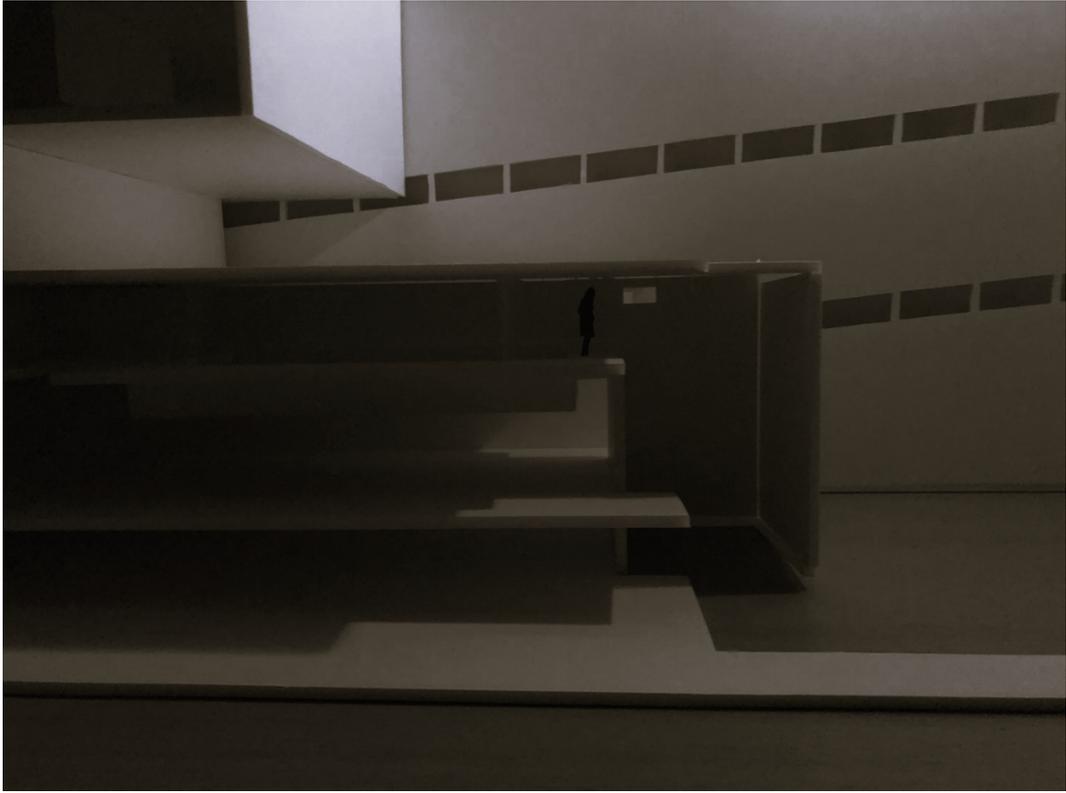


図 6-16 大地之拝所

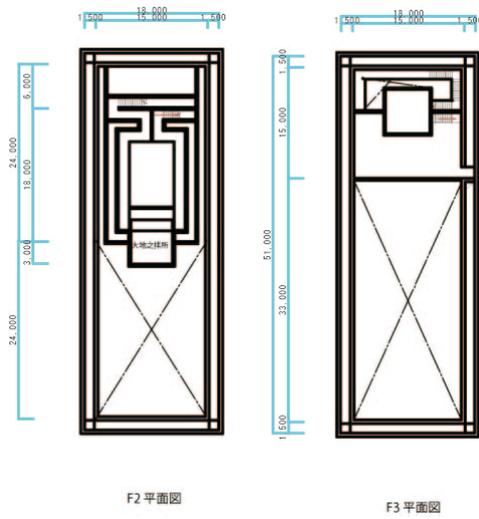


図 6-17 大地之拝所から零之間までの経路



図 6-18 零之間

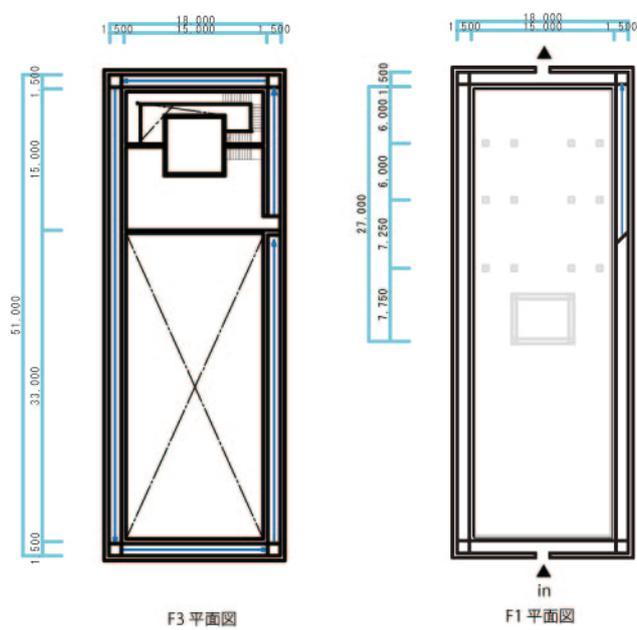


図 6-19 零之間から出口までの経路



図 6-20 虚之拝所側

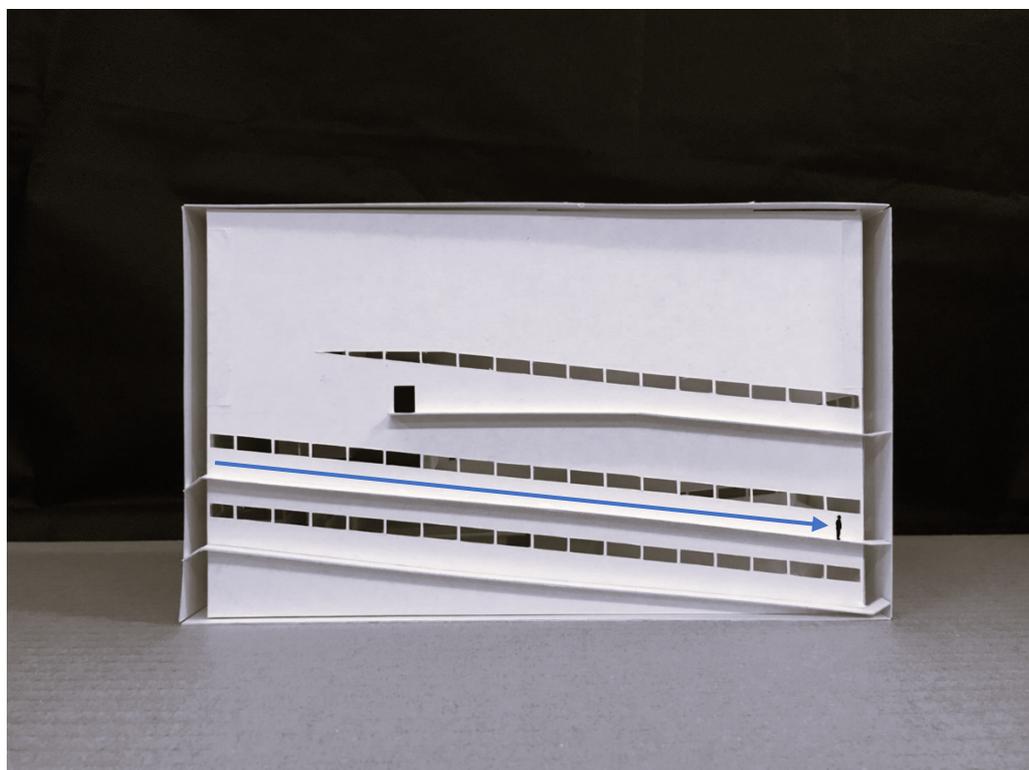


図 6-21 下りのスロープ

6-6.日本における都市型「祈りの空間」の構造計画

構造計画を反影させた断面を(図 6-21)に記す。

都市型「祈りの空間」の構造計画の前提として、参照すべきその空間特性を先に記す。

- 1、雑多な都市空間から明確に隔離された聖域であること。
- 2、実の内陣では、零之間が中心に据えられ、かつ、それが垂直の基準となること。
- 3、零の間の上下には、対をなして翼廊+拝所が配置されること。
- 4、空と大地という垂直方向に組まれた空間性を強く示すこと。

次に、これらの特性を踏まえた構造計画について記す。

- 1、構造は鉄筋コンクリート造とする。最外縁の壁厚は 450mm として、内部の壁よりも厚くする。さらに、内周壁と外周壁を外陣部の参道・天井の水平面材で接合させて、二重の殻が一体となった強固な覆いを構築する。こうして、都市との隔離をより強調できるようにする。
- 2、実之内陣は、最下部を大地、最上部を 450mm 厚のマットスラブとして区画する。区画された空間の垂直中央部をなす零之間では、3 枚の壁梁が貫き、これらが外周壁と接合して、実の内陣のコアをなす。
- 3、上部翼廊は、零之間から伸びる壁で支えられるとともに、最上部のマットスラブから下部に伸びる柱状の束で吊り下げられる。下部翼廊は大地から上方に伸びる柱によって支えられる。
- 4、実之内陣では、上下の区画以外の構造は梁や厚いスラブなどの水平方向の材によらない支え方を採用することで、空と大地という垂直方向に組まれた空間特性を活かした構造形式となっている。さらに上部翼廊は最上部のマットスラブからの吊り下げ、下部翼廊は大地からの支えとすることで、空と大地の拝所であることがより強調される。

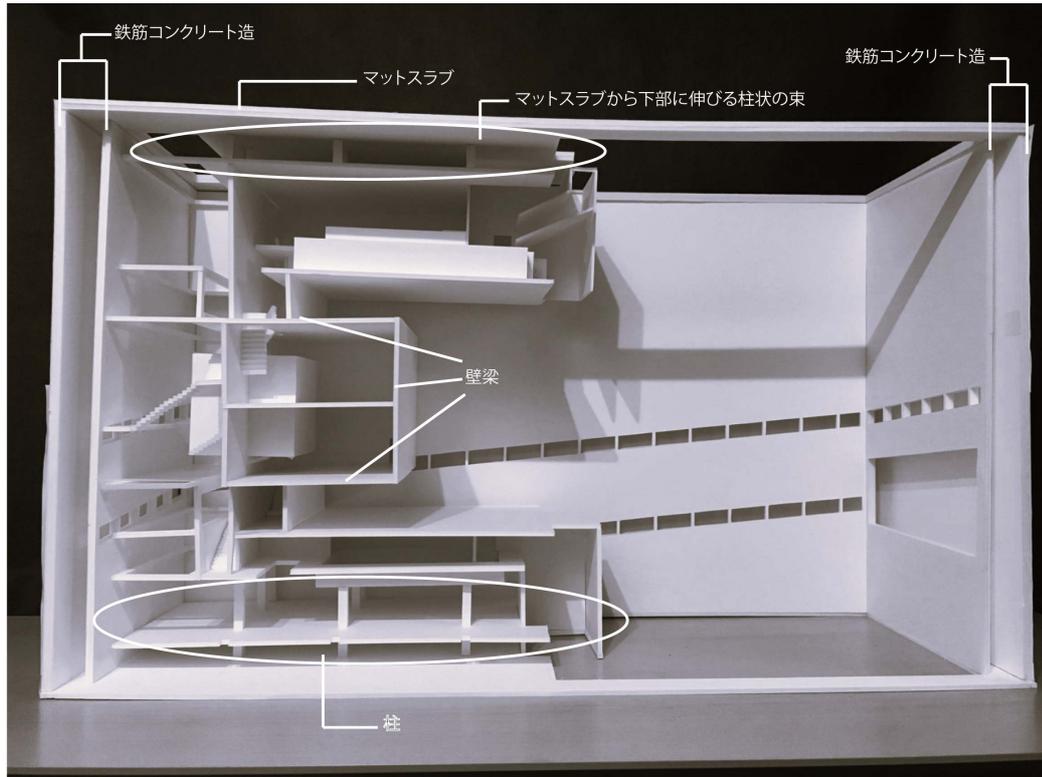


図 6-21 日本における都市型「祈りの空間」の断面

終章

終-1. 各章のまとめ

第1章では「祈り」と「祈りの空間」の定義から本設計で扱う日本における「祈りの空間」と日本における凝集された「祈りの空間」について定義した。またそれらを踏まえて日本における都市型「祈りの空間」の定義を記した。1-1.では「祈り」を絶対的なものを志向せざるを得ない人間の自然本性に由来する行為・状態、「祈りの空間」を人間が絶対的なものを志向するための構えを持つ場と定義し、その事例を記した。1-2.では日本における「祈りの空間」が自然信仰に根を据えて形成された「祈りの空間」であると定義した。日本における凝集された「祈りの空間」については、日本の「祈りの空間」の空間構成を単体建築に凝集して形成された「祈りの空間」と定義した。日本における都市型「祈りの空間」は、日本の都市において、空と大地を自然信仰核に据えた構えを持つ単一建築と定義した。

第2章では、日本における「祈りの空間」の基本構成についてまとめた。2-1.では線形空間構成の線形直列空間構成と線形並列空間についてまとめた。線形直列空間構成は、一本の経路に沿って全体が展開されることで、絵巻物をくりひろげて見ているような経験が可能な空間構成である。この空間経験が高揚感あるものとして保持できるように最奥部に核となる建築を据えることが必要となる。一本の経路で数珠つながりになった空間の継時的観賞と最奥部の核心空間がこの構成の特質であるということを記した。線形並列空間構成は、横一列に並ぶ建築群を同時に鑑賞することを重要としている。2-2.では対称空間構成についてまとめた。この構成は、中心軸を挟み相同な空間の器が配置されるが、その中に代入される空間は対照的な質をもつ。そしてこれは西洋や中国の完全性の象徴としての対称空間とは異質であり日本に固有の特質であることを記した。2-3.では円環空間構成についてまとめた。この構成は、経路がループを描くため、経路上に奥は発生しない。従って、経路上に核心となる建築を置く必要もなく、各建築に明確なヒエラルキーが生じない。また、自らが描くループによって、ループの内側領域と、外側領域という2つの領域を形成するという特質をもつことを記した。

第3章では自然信仰を根に据えた「祈りの空間」について山、海、大地に分けてまとめた。3-1.では山の信仰を根に据えた「祈りの空間」についてまとめた。この「祈りの空間」は山頂に対して線形直列空間構成を成し、尾根に対しては線形並列空間を形成するという特質をもつ。また直列と並列の二つの空間の結び目には円環、又は両空間の性質を併せ持つ建築を挿入しており全体空間として統合されていることを記した。この性質をよく示す事例は吉備津神社と金刀比羅宮である。3-2.では海の信仰を根に据えた「祈りの空間」についてまとめた。住吉大社や厳島神社の線形直列空間構成は背後に揺るがない信仰核となる山や、「ひもろぎ」を置き、それに守護される形で陸を基点に海へとまっすぐ向かっている。そのため海を原信仰とする「祈りの空間」は広大な海に対して背後に揺るがない核心を置き、陸

を基点に線形直列空間構成を形成することが特質であることを記した。また巖島神社においては線形直列空間構成を対称軸にしつつ、コの字で海を受け止める建築構成をとる。海は巨大な虚の空間であり、平等院鳳凰堂の池が海に置き変わった構成といえる。住吉大社と比較すると基礎構成が幾重にも複合した複雑な空間構成である。3-3.では大地の信仰を根に据えた「祈りの空間」についてまとめた。生島足島神社では床板がない大地そのもの御神体としている。大地を御神体とする宮殿と、その覆い屋である本殿が入れ子をなし、徹底して隠すことが意図されている。一方で延暦寺根本中堂は仏のいる内陣が土間(=大地)であり、拝所である外陣中陣は一層分高い板敷きの空間である。中陣から底の見えない仄暗い空間を見下ろすという空間経験は、大地への信仰を畏怖ともに体感させる。空間経験として大地への祈りができることを目指す本設計においては延暦寺根本中堂のあり方を参照することが有効であることを記した。

第4章では日本における凝集された「祈りの空間」についてまとめた。4-1.では羅漢堂型はコの字の左右対称空間であること、東西羅漢堂それぞれで円環をなしながら全体としても一方通行による円環空間構成をなすこと、外観が平等院鳳凰堂に酷似していることが特質であることを記した。4-2.では垂直凝集された「祈りの空間」として積層型と二重螺旋型を挙げた。積層型は、3つの円環空間を積層して3層にした構成を持つ。水平凝集の3空間を垂直に積層させただけであり、垂直空間としての発見性には乏しいことを記した。二重螺旋型は、円環空間構成を二重螺旋化させて、水平面の積層ではなく、スロープによって立体的に滑らかな円環構成としているところに大きな特質がある。また頂部の太鼓橋を変換点に右回りから左回りへと、そして登りから下へと変化することも、この空間の重要な特質であることを記した。

第5章では第3章を基に日本における「祈りの空間」の把握を行い、設計条件を定めた。そして設計条件を基に設計指針と設計手法を定めた。5-1.では日本における「祈りの空間」の虚実の対称空間構成は日本に古代から根深くある手法として本設計においても有効であることを記すとともに、全体の設計条件を記した。5-2では設計指針を記した。設計指針1で空と大地を信仰核に設定し、2つの信仰核の聖性が高まるように設計指針2で実体と空虚の対称空間を設定し、設計指針3で実体の空間を拝所、空虚を空と大地に通じる禁足地に設定することを定めた。また、空と大地を信仰するために設計指針4で上に空之拝所、下に大地之拝所を設定した。設計指針5ではそれら二つの拝所を自然を信仰核にすえる日本における「祈りの空間」から形成することを定めた。そして最後に集約化のために設計指針6で実空間の全体が空之拝所と大地之拝所を上下の核に持つ凝集された「祈りの空間」として構成することを定めた。設計指針7で虚実の対称空間を内陣とし、その外周を囲うように外陣を設定し、外陣の空間集約化のために設計指針8で凝集された「祈りの空間」の構成を用いることを定めた。5-3では設計指針を満たすための設計手法を具体的に示した。

第 6 章では前章で定めた設計指針・設計手法を適応して設計した、日本における都市型「祈りの空間」の内容をまとめた。6-1.では日本における都市型「祈りの空間」が空と大地を信仰核に据えて、日本における「祈りの空間」の空間構成手法をどのように用いているのか、またそれらがどのように集約化されているのかが分かるように空間解剖図として示した。各部名称とその概略も記した。6-2.では幾つかの都市で配置パターンを提示し、日本における都市型「祈りの空間」が都市の違いに関係なく、設定した条件に合致するように設置可能であることを記した。6-3.では外陣と内陣に分けて平面計画と断面計画を記した。6-4.ではシークエンスにより全体を通して空と大地が実之内陣では暗示された空間として祈るのに対し、虚之内陣では顕示された空間として祈ることを記した。これにより空と大地への祈りが対称的かつ対照的になされうつことを示した。6-5.では日本における都市型「祈りの空間」が俗世界である都市とは強く隔離されること、実之内陣の零之間を中心に据え、その上下に均等に翼廊+拝所が浮遊すること、また実之内陣の零之間が垂直の基準となること、空と大地という垂直方向に組まれた空間性を強く示すことが構造計画として成り立つように、採用した構法とともに具体的な構造形式として記述した。

終-2. 日本における都市型「祈りの空間」の意義

日本において、「祈り」の原点は自然信仰にある。日本人は自然界の生命力の恵みに感謝しながら、狩猟や農耕を行い、時に荒れ狂う自然を畏れつつも敬ってきた。結果として、山や海といった自然を信仰の核とする場が形成され、それは古代から近世まで、神社、寺院に関わらず、建立年代の異なるさまざまな建築を加えながらも自然信仰核に寄り添う「祈りの空間」を形成してきた。しかし、近代以降、自然とともに生きる生業から離れた多くの人々は都市に移住することとなる。日々の生活が自然と縁遠くなり、さらに高度経済成長以後の都市の爆発的拡大もあり、現代都市においては聖なる自然を感じることは極めて困難となった。その一方で都市内に葬祭場や納骨堂などの「祈りの空間」が求められる場面も現代では増えてきている。しかしながら、それらは自然信仰に根を据えた日本における「祈りの空間」とは無縁のものが多い。

本設計では、このような現況の中で、都市においても自然信仰を根に据えた「祈りの空間」を提案することで、古代から近世にかけて日本人がつくりあげてきた自然に寄り添った「祈りの空間」を継承すること、近世に成立した凝集された「祈りの空間」の構成技法を活用することで単一建築にて「祈りの空間」を形成すること、さらにそれらは標準設計として都市を問わずに設置可能であることを示した。現代都市の中で日本の「祈り」の起源である自然信仰に基づく「祈りの空間」を提案できたこと、古代から近世にかけて持続的に発展してきた自然信仰に根を持つ「祈りの空間」の空間構成を継承できたこと、近世に成立した凝集された「祈りの空間」の構成手法を活用することで、敷地に制約の多い現代都市においても単一建築にて「祈りの空間」を形成できたこと、これらは本設計の大き

な意義である。また空間構成の踏襲であるため具体的な建築形態や構法の縛りを受けることなく現代建築として空間抽象化できたことにも大きな意義があるといえよう。

終-3. 修士設計の成果と課題

本設計の成果を以下にまとめる。

- ① 空と大地を自然信仰の核に据えた。これにより元来の日本のように自然信仰に根をもつ「祈りの空間」を形成することができた。
- ② 空と大地の信仰核の聖性を高めるために日本の「祈りの空間」に根深くある虚実の対称空間という構成技法をもちいた。実空間を拝所、虚空間を禁足地に設定した。これにより古代に成立した「祈りの空間」の構成技法を「祈りの空間」の中心として具現化することができた。
- ③ 空之拝所と大地之拝所を日本における自然信仰を根に据えた「祈りの空間」の構成を基に形成した。この工程により、古代から近世にかけて発展してきた日本の「祈りの空間」の構成技法を継承して空と大地を信仰する空間を設計することができた。
- ④ 空と大地を信仰する「祈りの空間」の実之内陣を上下に核を持つ凝集された「祈りの空間」として構成した。また、内陣の外周を外陣として参道を形成した。この参道も凝集された「祈りの空間」の構成技法を活用することで空間の集約化を図った。これにより凝集された「祈りの空間」の構成技法の継承ができたとともに、単一建築において「祈りの空間」を集約化することができた。
- ⑤ 配置計画において日本の諸都市における配置例を示すことで、計画した都市型「祈りの空間」が都市を問わず設置可能であることを示すことができた。
- ⑥ 構造計画においては、聖地としての都市からの隔離、空と大地を結ぶ垂直方向に展開する空間性を強調する構造形式を提示することができた。

本設計の課題を以下にあげる。

- ① 単一規模の設計のみを示したが、空間構成を踏襲する本設計の性格からも、より規模を縮小した場合の設計となる可能性もあるが、その検討には至っていない。
- ② 都市の状況に関係なく展開可能な設計としているが、気象気候の違いなどが、細部計画や空間計画の差異を生むはずである。しかし、その検討はしていない。

上記のような課題に対しても検討を重ねることで、より普遍的かつ有効性のある都市型「祈りの空間」の提案が可能になるものと思われる。今後の課題としたい。

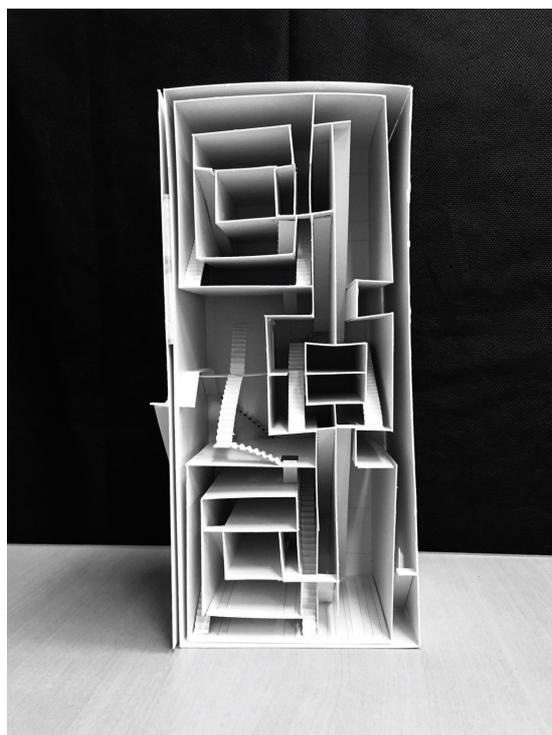
引用参考文献一覧

- 1) Andreas Volwahn : COSMIC ARCHITECTURE IN INDIA, Mapin Publishing,p15-17,2002.9
- 2) 中村 武 : 世界宗教建築辞典,東京出版,p50-51,p128,2001.9
- 3) 「世界建築史 15 講」編集委員会 : 世界建築史 15 講,彰国社,p82-117,2019.4
- 4) 村上石田 : 播磨名所巡覧図会の三,p29, 1084
- 5) 中川武 : 日本建築みどころ辞典, p 16, p 54, p154,1990
- 6) 中山和敬 : 大神神社,学生社,p16,1971
- 7) 文化財建造物保存技術協会 : 重要文化財賀茂神社本殿他七棟保存修理工事報告書,1981.12
- 8) 安原盛彦 : 日本建築空間史－奥と中心,鹿児島出版会,p101,2016
- 9) 井上允夫 : 日本建築の空間,鹿島出版会, p119, 1969
- 10) 大河直躬 : 生島足島神社の旧本殿（現本殿内殿）について, 本建築学会大会学術講演梗概集
- 11) 塚本哲三,斎藤長秋,長谷川雪旦:江戸名所図会 4 卷, 有朋堂,1927
- 12) 宗教法人曹源寺 : 群馬県指定重要文化財曹源寺さざえ堂保存修理工事報告書,p72-89,2018.3
- 13) 棚次正和 : 祈りの人間学－いきいきと生きる,世界思想社,2009
- 14) 新谷尚紀 : 神社とは何か,講談社現代新書,2021

付録

日本における都市型「祈りの空間」を提案するにあたり大きくは集約空間についての検討を収録している。

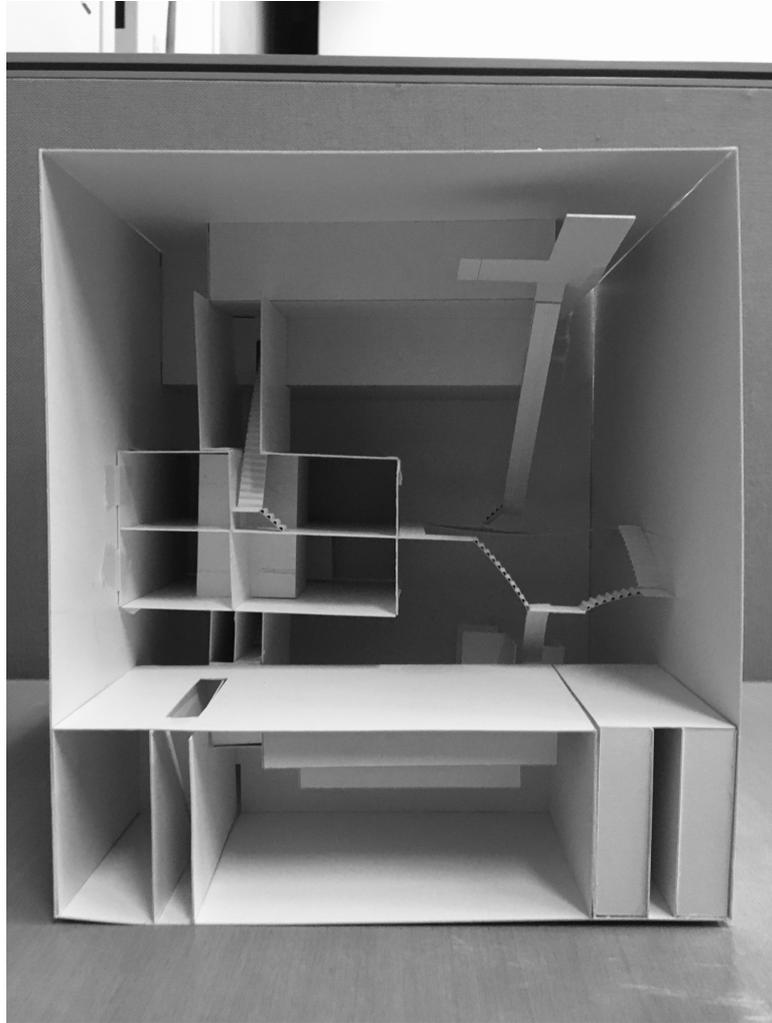
・検討案1 羅漢堂型のみを採用し、平面と断面を入れ替えた案



付録1 検討案1

検討案1は羅漢堂型のみを採用した案である。この案では空と大地を信仰核とし、その信仰核の聖性を高める虚実の対称空間構成手法を用いることができていない。榮螺堂型を採用しなかった理由としては、自己完結した空間として完成されていることから、建築を複合する際には不適と考えたためである。そして羅漢堂型は水平的に建築凝集された「祈りの空間」であることから都市に適応させるためには垂直性を持たせる必要があった。よって、平面と断面の入れ替えを行うことで水平的な羅漢堂を垂直的な羅漢堂に変更しようとした。しかし、この案では平面と断面を入れ替えることで、断面の面積が平面となる。すると平面に人が十分に巡礼するスペースを設けることができず、必然的に平面の面積を拡大せざるおえなくなった。また、羅漢堂型の入口は中央にあり、そこまでの経路設計に自由度がありすぎることからぼんやりとした空間となってしまう。よって、設計の論が成り立たないため不採用とした。

・検討案2 羅漢堂型と栄螺堂型の複合案



付録2 検討案2

検討案2は羅漢堂型と栄螺堂型を複合した案である。この案では、空と大地を信仰核とし、その信仰核の聖性を高める手法として虚実の対称空間を用いている。羅漢堂型に加え栄螺堂型を採用した理由として、雑多な都市において「祈りの空間」が成立するためには都市と切り離され隔離された空間が必要と考えたためである。この案では空と大地を信仰核とした「祈りの空間」を羅漢堂型によって上下に核をもつ「祈りの空間」として集約できている。しかし、栄螺堂型によって虚実の対称空間が混同し聖性を弱めている。虚実の対称空間は日本における「祈りの空間」の聖性を高める手法として根深くあることから聖性を弱めてしまうと意味がない。従って不採用とする。

謝辞

本設計を進めるにあたりご指導頂きました渡辺菊真准教授、田島昌樹准教授、西内祐晶准教授に深く感謝申し上げます。私の思いを本設計において最後まで貫くことができたのは先生方の熱いご指導のおかげです。

特に渡辺准教授には設計が進まず悩んでいる時期に幾度ものご指導を頂きました。また稚拙な論考しか繰り出せない自分自身にも最後まで丁寧にご指導して頂きました。この学恩は今度の活動で応え示したいと思います。

本設計を含め、これまでの学生生活は多くの先輩、同輩、後輩に支えられてのものであったこと、ここに深く感謝します。

最後に、6年間もの大学生活を支え理解を示してくれた家族に心より御礼を申し上げます。